

ラフ・シ語の研究

——タイ国チェンライ県におけるラフ・シ族の言葉の予備報告——

西田 龍 雄*

A Preliminary Study on the Lahu Shi Language in Chiang Rai Province

by

Tatsuo NISHIDA

The aim of this paper is to describe briefly and tentatively the phonemic and grammatical structures of the Lahu Shi language, gathered, using the Burmese language, from a lady informant living in a Christian Lahu village at a Nikhom near Mae Chan, northern Thailand during the present writer's field trip in 1964.

Linguistically, Lahu Shi is clearly divergent from the other Lahu languages, Lahu Na, Lahu Ni, on the phonological, grammatical and lexical levels. As regards the segmental phonemes, the distinction between velar and post-velar stops reported by Matisoff in the Lahu Na of Chiang Mai province is not maintained in the Lahu Shi language in question.

This dialect shows a simple phonemic system, having 23 single consonants: /k kh g p ph b t th d ts tsh dz s f h z v ɣ ŋ m n ʔ l/, 8 vowels of two series: oral and laryngealized: /i e ε ɤ a u o ɔ/ (laryngealized) and /ih eh eh ɤh ah uh oh ɔh/ (oral) and 5 tonemes: high level, mid level, low level, rising and falling. The gliding tonemes, rising and falling, are realized as a high rising or a high falling tone respectively in laryngealized vowels (characterized by laryngealization or glottalization), but as a low rising or a low falling tone in oral vowels.

Syllable structure is always CV or CVV with a toneme. No consonant cluster occurs at the initial position, while a syllable has no glottal stop ending.

A word may consist of one to four morphemes. Bi-morphemic words are most frequent.

Words of the action-state class can easily be distinguished from its accompaniment by a bound morpheme *ve* (VP). Words refer to objects are prefixed by a bound morpheme *ʔah-* or *ʔôh-*(NP).

Tonal change occurs quite frequently: a sequence of two high tones results in that of low and high tones. The language seems to be following the similar process of changing from a syllabic-tone type to a quasi word-tone type as seen in the Akha language, although the latter has more clearly a feature of stress. (See T. Nishida, "A preliminary report on the Akha language," *Studia Phonologica*, IV 1965/66.)

* 京都大学文学部

まえがき

1964年の秋、わたくしは、チェンライ県メーチャン郡、セン・チャーイにある Nikhom に滞在して、その近辺の山地民の言葉を調査した。この Nikhom の管轄内には、アカ族、ラフ・シ族、ヤオ族などがいた。わたくしは、アカ語の調査からはじめたが、その調査が一段落ついた11月の終り頃から（正確には11月20日から、12月17日まで）ラフ・シ族の言葉の調査にとりかかった。

ここで発表するのは、そのときに調査したラフ・シ語についての予備的な報告である。本稿はラフ・シ語の音素構造および文法体系の概略を記述することを目標にしている。¹⁾

I ラフ族の分布地域と従来の研究

1. ラフ族の分布地域は、リス族、アカ族と同じようにならかなり広い範囲におよんでいる。まず本拠地と考え得る中国雲南省の西部（瀾滄江と怒江の間）からビルマ国境地帯にかけて、もっとも多くのラフ族がいる。この地域から、西と南に下ってビルマのシャン州の西部および東部の地域、そしてラオスの西北部からタイ国北部のチェンライ県、チェンマイ県、ターク県にラフ族は点在する。²⁾ したがって現在わかっている限り、ラフ族の分布地域を大別すると、つぎの四つになる。³⁾

A 中国雲南省

a 瀾滄拉祜族自治区 b 孟連傣・拉祜・佤瓦族自治区, c 耿馬・傣・佤瓦族自治区

B ビルマ・シャン州

a 北部シャン州 モン・ルンの東部 b 南部シャン州 ケントゥーン周辺

C ラオス西北部

a ナムタ県 b ムオン・シーン

D タイ国北部の諸県

a チェンライ県 メースワイ周辺 b チェンマイ県 チェンダオ周辺 c タ

- 1) この調査に多くの援助を与えて下さったタイ国学術研究会議ならびに内務省とくに Nikhom の方々に深く感謝しなければならない。わたくしの今回の言語調査については、つぎの拙稿をみられたい。西田龍雄「タイ国北部の言語調査について」『東南アジア研究』3巻3号、「アカ語の音素体系——タイ国北部における山地民アカ族の言語の記述的研究」『音声科学研究』IV1965/66、「ビス語の研究」『東南アジア研究』4巻1号、「リス語の研究」『東南アジア研究』5巻2号など。
- 2) F. M. Lebar G.C. Hickey and J. K. Musgrave, *Ethnic groups of mainland Southeast Asia*, HRAF. 1964. p. 30 参照。
- 3) この分類は、便宜的なものとしてかりに掲げたものであって、今の段階では厳密な分類はできない。桂満希郎「ラフ・ナ語の音素体系」『東南アジア研究』6巻3号にも同様な分類がなされ、分布図があげられているから (p. 131) ここでは分布図は省略する。

ーク県 ターク周辺⁴⁾

ラフ族の分布は、このように中国、ビルマ、ラオス、タイの四カ国にまたがる広い地域にわたっているために、それらの部族間の言葉もかなり大きく相違していることは十分に予測できる。しかしこれらの地域のラフ語で調査されていない言葉のほうが圧倒的に多いために、この予測を全般にわたって確証することは、いまの段階では不可能に近い。普通ラフ族は、女性の服装の色から、黒ラフ族 (Lahu Na), 赤ラフ族 (Lahu Ni), 黄ラフ族 (Lahu Shi), シェレーラフ族 (Lahu Shehleh) の4部族に大別される。この分類は、各部族の自称とも概略一致するが、言葉の面からは必ずしも妥当ではなく、なお検討が必要である。⁵⁾ たとえば、ターク県のラフ族は、ラフ・ナ族と称しているにもかかわらず、ケン・トゥーンのラフ・ナ族、チェンダオのラフ・ナ族の言葉とは音素体系で著しく異なっている。チェンダオのラフ・ナ語は、ターク県のラフ・ナ語よりも、むしろここで報告するラフ・シ語のほうにより近い。

それぞれの分布地域の内部で、ラフ・ナ語、ラフ・ニ語、ラフ・シ語、ラフ・シェレー語の下位分布の状況がはたしてどのようなものであるのかは、いまの段階では、あまりよくわからない。

2. ラフ語についての報告は、これまでにいく種類かあった。たとえば Prince Henri d'Orléans の旅行記 *Du Tonkin aux Indes* (Paris: 1898), その英訳 *From Tonkin to India* (London: 1898) に、ほかの少数部族の言葉と並んで掲載されたわずかの語彙、またそれから引用した G. A. Scott の *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*, pt. 1. vol. 1 (Rangoon: 1900) に含まれる250語ほどの語彙、Davies の *Yunnan* (Cambridge: 1909) につけられた160語ほどの語彙、J. Monpeyat の *Notes sur les Mousseux de la province de Muong-sing* (Haut-Laos occidental) (R. I. n. s. 4.: 1905) の報告に提供された少数の語彙などは、言語学の目的のためには使えない。

既発表の資料の中で、声調表記をともなった信頼できる研究には、まず J. H. Telford の *"Handbook of the Lahu (Muhso) Language and English-Lahu Dict."* (Rangoon: 1938) があった。この書物はビルマ・シャン州セントゥーン周辺のラフ・ナ語すなわちラフ族の共通語を実用的な目的をもって記述したものである。J. H. Telford は、長くビルマに滞在して、

4) ラフ族の人口は正確にはわからないが、Lebar の上掲書には、つぎの数字があげられている。中国のラフ族139,000 (1953年の中国の統計にしたがう)、ビルマのラフ族66,000、ラオスのラフ族2,000、タイ国のラフ族は119部落に15,000人いる (Young による)。そして全人口は20万を上回るだろうという。

Народы Восточной Азии (1965 Москва) でも、同じく53年の中国の統計にしたがって、中国のラフ族を139,000としているが (p. 32), Народы Юго-Восточной Азии (1966 Москва) では1965年の統計によるとして、ビルマのラフ族40万、タイのラフ族15万、ベトナムのラフ族3万(ラオスの誤り?), 計58万の数字をあげている (p. 17)。タイ国のラフ族については、Dr. Hanks, I. Sharp, "A report on tribal peoples in Chiengrai province, North of the Mae Kok river," *The Siam Society*, Bangkok, 1964 に部落数、世帯数の詳しい数字が報告されている。

5) ラフ語ナ方言、シ方言というのが正しいであろうけれども慣例にしたがって、ラフ・ナ語、ラフ・シ語と呼ぶことにする。

ローマ字によるラフ語の正書法 (Standard orthography) を発案し、それをもって新約聖書を翻訳した (これには声調表記をあたえていない。 *The New Testament in Lahu American Baptist Foreign Mission Society. Rangoon: 1949*)。⁶⁾

Bの地域のうち、ケントゥーン周辺のラフ・ナ語は、Telford のこの書物のおかげで大体をつかむことができる。そのあと、1967年になって、どこのラフ語であるかは明記されていないが、ビルマ地域のラフ語の音素体系が Robbins Burling によって記述された (R. Burling *Proto Lolo-Burmese*. IJAL vol. 33, No. 1)。⁷⁾

しかしAの地域のラフ語は、断片的な引例にとどまって、未だまとまった報告は発表されておらず⁸⁾、Cの地域で話されるラフ語にいたっては、分布地域の詳細さえも明らかではないのが現状である。

このような状況の中で、Dの地域のラフ語は数人の言語学者によって最近調査されはじめた。⁹⁾

すでに発表された研究の中では、J. A. Matisoff の学位論文 *A Grammar of the Lahu Language* (1967) がもっともととのっている。¹⁰⁾ これは著者が1965年2月から翌年3月まで、チェンマイ県チェンダオにて、ラフ・ナ語を対象として行なった言語調査のくわしい成果である。¹¹⁾ その文法記述を部分的に発展させた数編の論稿も、その後関係者に配布されている。¹²⁾

このようにラフ・ナ語は、多くの研究者によってとりあげられたけれども¹³⁾、残りの3部族ラフ・ニ語、ラフ・シ語、ラフ・シェレー語は、どの地域の部族に関しても、未だ報告されていない。

3. タイ国山地民の間では、ラフ語が共通語として使われている。これはラフ語が覚え易く
- 6) 聖書のラフ語訳には、その後、Paul Lewis 訳が出版されている。British and Foreign Bible Society, London, 1962 (未見)。
- 7) R. Burling の *Proto Lolo-Burmese* については、拙稿「ロロ・ビルマ語比較研究における問題」『東南アジア研究』6巻4号をみられたい。
- 8) 中国のラフをもっとも多く引例している論文として、胡坦、戴庆厦「哈尼語元音的松緊」『中国語文』1964, 北京。
- 9) Rev. Larry M. Peet, "Towards a more Loquacious Lahu," Overseas Missionary Fellowship, Chiangmai, 1964 (mimeographed). タイ国のラフ・ナ語を対象とした実用的な書物であるらしい (未見)。
- 10) University of California, Berkeley, Ph. D. 1967. University Microfilms, Inc. Ann Arbor, Michigan.
- 11) Matisoff は主にチェンダオ近くの三つの部落のラフ・ナ語を調査した。1) Huey Tad チェンマイから北方約65キロ。2) Pahsu, Huey Tad よりさらに山地を3時間ばかりのぼった部落。これは Huey Tad の支族の部落である。3) Shatudeu チェンマイから北方120キロ Farng を越えてビルマ国境に近い部落。
- 12) Glottal Dissimilation and the Lahu High-Rising Tone: a Tonogenetic Case-study (mimeographed), Verb Concatenation in Lahu: the syntax and semantics of simple juxtaposition (mimeographed).
- 13) 最近では桂満希郎がメーサーイのラフ・ナ語を調査している。上掲『東南アジア研究』6巻3号。

話し易いという理由のほか、ラフ語自体に多くの変種があるために、たとえほかの山地民がうまくないラフ語を話したにしても、とくに奇異に感じないゆえであろうと思う。

これらの言葉が、いままでよく記録されなかったのは、第1にその言葉を話す部族が、交通路から離れた山地部落に住んでいたことと、言葉自体の体系が相当に扱い難かったことによる。

この調査はビルマ語を媒介として行なった。¹⁴⁾ 当時メーチャンにいた（その後、メースワイに移住した）ラフ・シ族の一部族は、ビルマから移動して来てまもない状態にあり、その共通語としてラフ・シ語のほか、ビルマ語とシャン語を使っていた。タイ語は理解はしたが、話さなかった。質問に用いたビルマ語を、そのまま直訳的に置きかえることもあったが、調査は短期間ながら順調にいった。語彙約1,500、物語数編、文章約100を記録した。インフォーマントは既婚の若い女性になってもらった。この人の経歴について詳細な点はわからないが、ラフ・シ語のインフォーマントとしては悪くはなかったと思っている。¹⁵⁾ その当時において、どの研究者も、この言葉を調査していなかった。わたくしの集めたラフ・シ語の資料は多くはないけれども、その点では価値をもっていると思う。

4. 本稿は、さきに発表した「リス語の研究」と概略同じ構成をとっている。わたくしのもつロロ・ビルマ共通態の設定を目標とする構想の第3の段階、ロロ語系1の解明のためには、その予備的な段階として、各々の言葉の記述がどうしても必要であった。わたくしは前稿「リス語の比較研究」においても、ラフ・シ語、ラフ・ナ語（ターク）を引例したが、未だその体系を提出していなかった。本稿でそれを補いたい。

II ラフ・シ語の音素体系

つぎに、メーチャンで話されたラフ・シ語の音素体系を記述する。この言葉もリス語と共通した性格をもっている。

1. ラフ・シ語の一形態素は、大部分が単音節であり、一音節は一種のトネームをともなったCV または CVn 形式（-Vn は nasalized vocoids）をなしていて、それ以外の結合形式はない。ラフ・シ語の単純単語は、一形態素あるいはそれ以上の連続形式をとり、実際には2形態素から成る単語が圧倒的に多いから、発話の最小単位は、閉じたつながり関係にある CV・CV 形式または CVn・CV 形式をとるのがもっとも多い。

まず、同系統の言葉に対して、ラフ・シ語の音素体系がもっている特徴をつぎに列挙しよう。¹⁶⁾

14) 調査の状況については拙文「タイ国北部の言語調査について」を見られたい。

15) わたくしのインフォーマントはすでにタイ国にはいないとのことである（桂氏の報告による）。

16) これは比較言語学的な意図ではなく、言語類型論的に見た意見である。上掲拙稿「ロロ・ビルマ語比較研究における問題」p. 206 以下を見られたい。

- 1) 音節はすべて母音音素に終わる開音節であり，閉鎖音に終わる閉音節はない。CVn で表記した -Vn は音声学的には，鼻音化母音にあたる。(cf. p. 17-)
- 2) 子音音素の体系には，voiceless の系列と，voiced の系列の対立がある。そして voiceless の系列には aspirated と unaspirated の対立がある。
- 3) 音節初頭に子音結合はあられない。
- 4) 母音音素の体系には，普通母音に対立する緊喉母音（喉頭を緊張させて発出する母音）の系列がある。(cf. p. 16-)
- 5) 普通母音の音節がとるトネームの種類と緊喉母音の音節がとるトネームの種類とは重複した分配関係を示す。(cf. p. 7)
- 6) 緊喉母音は，普通母音よりももちろんあられる頻度は少ないが，母音の性格と初頭子音の結合関係にとくに限定関係は認められない。(cf. p. 17)
- 7) ビルマ語から借用された単語がかなり多くあって，本来のラフ・シ語の体系に新しい特徴を加えている。たとえば CVn 音節のタイプを作るなど。(cf. p. 18)
- 8) 一つの音素が，環境で補い合う関係にある変形 (allophone) をもつことがあるが，リス語ほど著しくはない。(cf. p. 13-14)

以下，これらの特徴を音素体系全体の記述と関連して，より具体的に説明しよう。

2. トネーム (声調)

1) 基本的トネーム 5 種

ラフ・シ語のトネームは，高平型，中平型，低平型の level tones と上昇型と下降型の gliding tones を基本調とする register-contour mixed tone system をとっている。そして，上に指摘したようにこの方言には，普通母音と緊喉母音の 2 系列があって，その対立がトネーム型それ自体とトネーム型の分配関係に密接に結びついている。トネームの基本的な対立関係は，つぎの例から明らかである。

普通 (非緊喉) 母音

緊喉母音

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------|
| 1) 高平型 [ka: 55 veĩ 11] “to hear” | |
| 2) 中平型 [ka: 33 lə 35] “paper” | |
| 3) 低平型 [ka: 11 veĩ 11] “to be dumb” | |
| 4) 上昇型 [ʔəfi 31 ka: 13] “branch” | 6) [ʔafi 33 kə 35] “water” |
| 5) 下降型 [ta: 55 ka: 31] “trading” | 7) [nə 35 kə 53] “crow” |

ラフ・シ語の母音音素の緊喉・非緊喉の性格と，トーン型のこのような分配関係は，ビス語やアカ語と離れて，リス語に近い。ラフ語とリス語は，この点に関して同じ類型に属している。

ラフ・シ語の緊喉母音と非緊喉母音の差異を職能的な対立と認めるならば、緊喉母音がとるトーンの型が、普通母音よりも少し高い register であっても、4) の [13] と 6) の [35], 5) の [31] と 7) の [53] は、それぞれ上昇型および下降型に該当する完全に補い合う allotone であるということができる。level tones にはこのような変形がなくて、gliding tones にのみ母音の性格の違いが反映するのは、ラフ(シ)語の特徴である。上昇型と下降型はつぎのようになる。

	普通母音	緊喉母音
gliding tone	[rising [13]	[35]
	[falling [31]	[53]

したがって、ラフ・シ語で意味の弁別をになうトーンすなわちトネーム(声調)は、5種類であると認めて差支えがない。

ここで用いるトネームの表記法と、母音音素の2系列の分配関係を示すとつぎのようになる(母音の表記については母音音素の項で論じる p. 16)。

	普通母音(非緊喉)	緊喉母音
1) 高平型	/káh-veh/	“to hear”
2) 中平型	/kah-la/	“paper”
3) 低平型	/kàh-veh/	“to be dumb”
4) 上昇型	/ʔəh-kǎh/	“branch” /ʔah-kǎ/ “water”
5) 下降型	/táh kâh/	“trading” /nǎ-kâ/ “crow”

高平型が単独で発音される場合には、非常に高い平板型をとる。

[ka:f̩ 66] “car”, [ŋa:f̩ 66] “fish”, [va:f̩ 66] “bamboo”

ゆるい低昇型 [112] トーンも観察される。[ʔa:f̩ 55 su:f̩ 112]. しかし、それが発話の最後で高平型にしたがう低平型トーンの変型であることは [ʔa:f̩ 55 su:f̩ 11 ni: 55] “garlic” との対照からすぐに理解できる。同じような例をあげよう。

[ʔa:f̩ 55 mi:f̩ 112] “fire”: [ʔa:f̩ 55 mi:f̩ 11 tseɪ 33 ki: 31] “kitchen”

[ʔa:f̩ 55 ku:f̩ 112] “head”: [ʔa:f̩ 55 ku:f̩ 11 pi:f̩ 55 veɪ 3:1] “to believe”

このようにラフ・シ語の変調現象はかなり頻繁におこる。

高平型+高平型の連続は、低平型+高平型の連続にかわる。

[ts'ɔ:f̩ 55] “person”, [ts'ɔ:f̩ 55 ha:f̩ 112] “young man”, [ts'ɔ:f̩ 11 khɔ:f̩ 55] “thief”, [ts'ɔ:f̩ 11 ʒa:f̩ 55] “child”, [hɛ:f̩ 55 pi:f̩ 11 khɔ 55] “jungle”, [hɛ:f̩ 11 p'ɪ: 55] “fox”, [sɛ:f̩ 11 ha:f̩ 55] “girdle”, [ha:f̩ 11 t'ɔ: 55] “trousers”

これらの違った環境にあらわれる [ts'ɔ:f̩ 55] と [ts'ɔ:f̩ 11], [hɛ:f̩ 55] と [hɛ:f̩ 11], [sɛ:f̩ 55] と [sɛ:f̩ 11] は、それぞれ同一形態素の変型として扱わざるを得ない。単独にあらわれる [ts'ɔ:f̩ 55] を根拠として、高平型トーンをこの基本型と認めよう。もちろん、さきに

掲げたように、ラフ・シ語の2音節の単語には、高平型+低平型の連続もある。さらに例を追加すると、[nu:fi 55 pa:fi 112] “ox”, [p'i:fi 55 seɪ 112] “louse”, [mɔ:fi 55 ki:fi 112] “star” etc. があるが、2音節単語で中平型+中平型の連続をもつ単語は極めて稀である。(筆者の資料では、[mei 33 xeɪ 33] “goods”, [dzu:fi 33 lu:fi 33] “bell” の2例に限られる)。したがって、ラフ・シ語はやはりアカ語と同じように、音節高トーン体系から単語高トーンに移行しつつある言葉あるいはすでに移行してしまった言葉であると考えてよいのではないだろうか。¹⁷⁾ 現在の段階で2音節単語がとり得るトーンの連続関係の数は、日本語のように少なくはないが、近い将来には、かなり限定された数に統合されることは十分に予測できる。[na: 11 k'ɔ:fi 55] “nose” の [k'ɔ:fi 55] と [ʔɔfi 31 k'ɔ:fi 11] “cavity” の [k'ɔ:fi 11] が、別の形態素であるとは考えられず、この<鼻>を意味する単語は、すでに低平型・高平型連続に固定しているとみなさざるを得ない。

このことと関連して [ʔafi-] にはじまる単語のトーンについて論じよう。[ʔafi-] を第一形態素とする単語のトーン連続には、いちおう四つのタイプを設定できる。

- i) 高・低型, ii) 低・高型, iii) 中・降型, iv) 中・昇型
- i) [ʔafi 55 kU:fi 112] “head” [ʔafi 55 mi:fi 112] “fire” [ʔafi 55 su:fi 112] “onion”
[ʔafi 55 pi:fi 112] “insect”
- ii) [ʔafi 11 pɛ:fi 55] “bee” [ʔafi 11 zeɪ 55] “mother” [ʔafi 11 ts'u:fi 55] “thorn”
[ʔafi 11 gɛ:fi 55] “lance”
- iii) [ʔafi 33 x̥u 53] “needle” [ʔafi 33 l̥ɛ 53] “salt” [ʔafi 33 pɛ:fi 31] “duck”
[ʔafi 33 tseɪ 31] “eagle”
- iv) [ʔafi 33 n̥a 35] “gun” [ʔafi 33 s̥a 35] “life, age” [ʔafi 33 na:fi 13] “disease”
[ʔafi 33 tʃɔ:fi 13] “umbrella”

この [ʔafi-] にはじまる単語は、つぎに示し得るように、核形態素が平板型トーンであれば [ʔafi-] が高平型または低平型になり、核形態素が昇降型であると、[ʔafi-] は中平型になった。

【先行形態素】	【核形態素】
高平型	低平型
低平型	高平型
中平型	下降型・上昇型

筆者は概略この様式の成立を認めたい。

[-veɪ] に終わる2形態素(2音節)の単語にも同じような変調現象があらわれるが、[-veɪ] のトーン型はかなり統合されている。

- i) [-veɪ 3:1] iv) [-veɪ 11]

17) 拙稿「アカ語の音素体系」『音声科学研究』IV p. 6. 補注1 (p. 39)参照

i)	[ts'ɔ:fi 33 veĩ 3:1]	“to be sweet”	中平型 -[3:1]
	[hõ: 33 veĩ 3:1]	“to dye”	
	[mɛ: 33 veĩ 3:1]	“to be ripe”	
ii)	[pa:fi 55 veĩ 3:1]	“to be thin”	高平型 -[3:1]
	[ho:fi 55 veĩ 3:1]	“to sell”	
	[pi:fi 55 veĩ 3:1]	“to give”	
iii)	[ho:fi 11 veĩ 3:1]	“to be hot”	低平型 -[3:1]
	[k'a:fi 11 veĩ 3:1]	“to cross”	
	[p'i:fi 11 veĩ 3:1]	“to be blue”	
iv)	[do:fi 31 veĩ 1:1]	“to drink”	下降型 -[1:1]
	[mo:fi 31 veĩ 1:1]	“to see”	
	[mɛ̃ 53 veĩ 11]	“to be hungry”	
	[lɛ̃ 53 veĩ 11]	“to lick”	
v)	[kɯ 35 veĩ 11]	“to speak”	上昇型 -[1:1]
	[gɔ̃ 35 veĩ 11]	“to plough”	
	[leĩ 13 veĩ 11]	“to play”	
	[tʃ'eĩ 13 veĩ 11]	“to drop”	

[-veĩ] を第2音節とする単語のトーン型の連続関係はつぎのようになる。

【核形態素】 高平型, 中平型, 低平型 【従属形態素 -veĩ】 下降型
 上昇型, 下降型 低平型

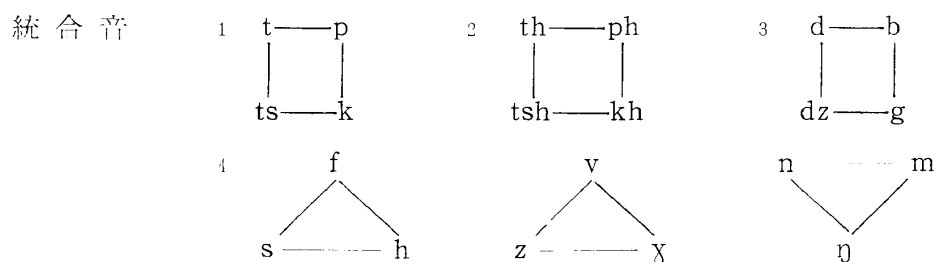
この現象も、やはりラフ・シ語が単語高トーン体系へ向かった結果を示しており、その過程において、[ʔafi-] の場合と同じように平板型トーンと昇降型トーンが大きく区別されている、ラフ・シ語のトーン型については、なお検討すべき余地が多く残されているが、基本的な性格は、この変調現象をトーン連続関係の様式化の結果としてとらえることによって明瞭にできるであろう。

3. 子音音素

ラフ・シ語の子音音素目録は、23種の単純音素から成りたち、音素結合はない。子音音素はつぎのように分類できる。

stops	affricates	fricatives	nasals	lateral
velar k kh g ? :		h ɣ :	ŋ :	
labial p ph b :		f v :	m :	
dental t th d :	ts tsh dz :	s z :	n :	l

この子音音素を、統合音と非統合音の関係から分けると、つぎのようになる。



非統合音 ? 1

筆者が「ロロ・ビルマ語比較研究における問題」にあげた類型にしたがうと、ラフ・シ語は、1-b), 2-b), 3-b), 4-a) のタイプに属することになる。

本稿のはじめに、この言葉の特徴として、voiceless : voiced の対立と aspirated : unaspirated の対立があることを指摘した。それらの対立は具体的には、velar, labial, dental の各系列で stops と affricates のいずれにもあらわれ、fricative には有声 : 無声の対立のみが認められる。しかし nasals と lateral にはそのいずれの対立もおこらない。この特徴を簡単な表にすると、つぎのようになる。(+ は対立があること、 - は対立がないことを示す。リス語の特徴と比較されたい¹⁸⁾)

	[統合・非統合]	[統合]	[統合]	[統合]	[非統合]
	stops	affricates	fricatives	nasals	lateral
voiceless : voiced	+	+	+	-	-
unaspirated : asp.	+	-	-	-	-

ラフ・シ語の子音体系成立の概略を言うと、

- i) stop : affricate : fricative : nasal : lateral の調節法の対立
- ii) velar : labial : dental の調音点の対立
- iii) voiceless : voiced の声帯振動有無の対立
- iv) unaspirated : aspirated の氣息量の対立

の四つが中心になって、その可能な組み合わせのなかに、適宜すき間があたえられていることになる。

この対立関係は、もっぱら音節の初頭にあらわれて、末尾の位置には子音音素はたたない。タークのリス語とは単純音素の数で違っているが、これらの特徴自体は、まったく並行している。

18) この特徴をアカ語、ビス語およびリス語と比べられたい。拙稿「アカ語の音素体系」(p. 10)「リス語の研究」(p. 55)。ロロ・ビルマ系の言語では、voiceless : voiced の対立があるのとないのとで典型的に大きい相違を示している。この点ラフ語は、アカ語やリス語と典型的に近いことになる。しかし系統的に考察した場合にはそうではない。cf. 「ロロ・ビルマ語比較研究における問題」(p. 208-)

つぎに、ラフ・シ語の音声の性格と各音素の設定について述べたい。

1) 無声無気閉鎖音 /k p t/ /ʔ/

完全な閉鎖と破裂をもつ [k] [p] [t] が、たとえばつぎの単語で観察される。

[ka: 11 p'ɪ:ɦ 55] “floor”	[kə 35 veĩ 11] “to be cold”
[pa:ɦ 11 ta:ĩ 55] “rabbit”	[pa:ɦ 55] “frog”
[ta:ɦ 33 mɛ 35] “hammer”	[ta:ɦ 13 veĩ 11] “to carry with a pole”

[k] [p] [t] は同じ環境 [#-a:] で対立するから、それぞれ音素 /k p t/ をたてる。[p] のほかに破擦音 [pʰ] が観察されるが、[p] は [ɤ] 母音と連続することがなく、[pʰ] は [ɤ] とのみ連続するから、この両者は補い合う関係にあって、[pʰ] は音素 /p/ の変形 allophone とみなせる。

[pʰɤ:ɦ 55 veĩ 3:1] “to carry on one’s back”	
[pʰɤ:ɦ 55] “worm”	[na: 11 pʰɤ 35] “ear”

無声無気閉鎖音は、そのほか声門にもあらわれて、極めて弱い閉鎖と破裂しかもたない [ʔ] が観察される。とくに緊喉母音の前では、この声門閉鎖音ははっきり聞きとることができる。

[ʔaɦ 11 kə 35] “water”	[ʔɔɦ 31 be:ɦ 11] “a cover”
[ʔɛ 35 veĩ 11] “to pull down”	[ʔɤ 35 veĩ 11] “to bend”

ラフ・シ語では [ʔ] は zero とは対立しない。たとえば [ʔɛ:ɦ 13 veĩ 11] “to be small” は ×[#ɛ:ɦ 13 veĩ 11] とは対立しないから、たとえ明瞭な声門閉鎖がなくとも、あるいは閉鎖がまったく起こっていても、それを含む形態素を書きあらわすときには、構造的な特徴を示す音素として /ʔ/ を表記上付加することができる。これは構造的に見た単位の表現である。

2) 無声出気閉鎖音 /kh ph th/

完全な閉鎖と度合の強くない破裂をもつ無声出気音 [kʰ] [pʰ] [tʰ] が観察される。この出気の氣息は長くない。

[kʰa:ɦ 33] “crossbow”	[kʰa:ɦ 55 veĩ 31] “to be bitter”
[pʰə 35 veĩ 11] “to spread out”	[pʰa:ɦ 55 s'a: 13] “religion”
[ʔɔɦ 31 t'a:ɦ 31] “upside”	[ʔU: 55 t'a:ɦ 53] “before”

同じ環境 [#-a:] で対立するこれらの音声には、音素 /kh ph th/ をたてる。このほかに、無気音の場合と同じように、[pʰ'] があらわれる。[mɛ 35 pʰ'ɤ:ɦ 11] “face”, [ʔɔɦ 31 pʰ'ɤ:ɦ 53] “price”, [tʰ'ɔ:ɦ 55 tu:ɦ 11 pʰ'ɤ:ɦ 55] “grave”。

この [pʰ'] も [ɤ] 母音の前に限って観察され、[ɤ] と連続しない [pʰ] と補い合う関係にあるから、[pʰ] と [pʰ'] は一つの音素 /ph/ の allophone であるとみなせる。

3) 有声無気閉鎖音 /g b d/

完全な閉鎖と破裂をもち、そして軟かい [g] [b] [d] が観察される。

[ga:fi 11 veĩ 31] “to help”	[gɔ 35 veĩ 11] “to scratch”
[ba:fi 11 veĩ 31] “to shine”	[ba:fi 55 veĩ 31] “to joke”
[da:fi 31 veĩ 11] “to be good”	[da:fi 31 mi:fi 55] “torch”

同じ [#-a] の環境で対立する [g] [b] [d] には、それぞれ音素 /g b d/ をたてる。

この /b/ 音素にあたる [b] の allophone として上掲 [p] [pʰ], [p'] [p'ʰ] と並行して両唇摩擦音をともなった [bɸ] が [ɣ] 母音の前に限ってあらわれる。つぎの例がある。

[bɸɣ 35 veĩ 11] “to be satisfied with food”, [bɸɣ: 31 veĩ 11] “to write”

4) 破擦音 /ts tsh dz/

破擦音には alveolar [ts ts' dz] と palato-alveolar [tʃ tʃ' dʒ] が、たとえばつぎの例で観察される。

[tsa:fi 55 veĩ 31] “to eat”	[ts'a:fi 31 veĩ 11] “to be dirty”	[dza:fi 33] “very”
[tsɣ: 33 kɛ 35] “rubber”	[ts'ɣ:fi 55 veĩ 31] “to wash”	[dzɣ:fi 31 veĩ 11] “to tear”
[tʃɛ: 11 veĩ 11] “to hide”	[tʃɛ: 11 mi 55] “mortar”	
[ʔɔfi 31 tʃeĩ 31] “a clan”	[tʃ'eĩ 31 veĩ 11] “to bite”	[dʒeĩ 31 veĩ 11] “to lend”
[tʃɔ:fi 33 veĩ 31] “to turn”	[tʃɔ:fi 55] “person”	[dʒɔ:fi 13 veĩ 11] “to dye”
[tʃu: 55 veĩ 31] “to depend on”	[ʔafi tʃ'u: 55] “thorn”	[dʒufi 33 lu:fi 33] “bell”

[dz] は [a] 母音の前でやや口蓋音化する [dʒ]。

この例から明らかのように、この破擦音の 2 系列は、連続する母音音素との間に限定された分配関係をもっていて、その分配関係を検討すると、[ts] 系と [tʃ] 系の間に完全に補い合う関係が成立する。

	[i=]	[eĩ]	[ɛ]	[a]	[U]	[oũ]	[ɔ]	[ɣ]
[ts ts' dz]	-	-	-	+	-	-	-	+
[tʃ tʃ' dʒ]	+	+	+	-	+	+	+	-

したがって、これらの音声には一種の系列の音素 /ts tsh dz/ をたてれば十分である。音素 /ts tsh dz/ は [a] [ɣ] 母音と連続する環境においてのみ [ts] [ts'] [dz] の形をとり、それ以外の母音の前では硬口蓋音 [tʃ] [tʃ'] [dʒ] としてあらわれる。

5) 摩擦音 i) /s z/

摩擦音の第 1 として、上述の [ts] [tʃ] などにあたる [s] [z] [ʒ] が観察される。出気をともなった [s'] もあるが、それは [s] と自由に交替する。[sɔ 35 veĩ 11] ~ [s'a 35 veĩ 11] “to be rough” [s] [z] はいずれも摩擦の持続部が長く、-[sʂ] [zʂ] の形をとり、そのうえ口蓋化する傾向をもっている。[ʒ] はとくに摩擦が強く、口蓋に著しく接近して調音されて [j] に近い場合も多い。

[ʔɔh 31 sa:fi 13] “flesh” [zʂɔ 53 ni:fi 11] “today”

[seĩ 35 veĩ 11]	“to be thirsty”	[zʒeĩ 31 veĩ 35]	“bud”
[se:fi 11 lefi 55]	“three”	[zʒe:fi 31]	“house”
[ʔo:fi 31 su:fi 12]	“onion”	[ʒu:fi 31 veĩ 11]	“to take”
		[ʒo:fi 31]	“sheep”

[z] と [ʒ] は、連続する母音との間に、つぎのような分配関係をもって、補い合う関係にたっている。(+ は自由交替を示す)

	[i]	[eĩ]	[ɛ]	[a]	[U]	[oũ]	[ɔ]	[ɤ]
[z]	-	-	+	+	-	+	-	+
[ʒ]	+	+	-	(+)	+	-	+	-

そのうゑ [ʒa] と [za] (たとえば “child”) が自由交替をするから、[z] [ʒ] には音素 /z/ を、それに対して、その無声音 /s/ を設定する。ラフ・シ語のこの摩擦音の扱いはリス語ほど厄介ではない。

ii) 声門および軟口蓋摩擦音 /h ɣ/

[h] と [ɣ] が、たとえばつぎの単語で観察される。

[ha:fi 33]	“rice field”	[ɣa:fi 11 veĩ 31]	“to get”
[he:fi 11 veĩ 31]	“to be hard”	[ɣe:fi 31]	“a bear”
[ho:fi 13 veĩ 11]	“to smell”	[ɣo:fi 33 veĩ 31]	“to count”
[hU 13 veĩ 11]	“to stop”	[ɣu 53 k'e:fi 55]	“thread”

ここで音素 /h ɣ/ を設定する作業には問題はない。

iii) 唇歯摩擦音 /f v/

無声音 [f] とその有声音 [v] が、つぎの単語で観察される。

[fa 35]	“squirrel”	[va:fi 55]	“bamboo”
[fa 35 veĩ 11]	“to conceal”	[va:fi 33 veĩ 31]	“to find out”
[feĩ 11 veĩ 31]	“to send”	[veĩ 31]	“leech”
[foʔ35 veĩ 11]	“to wrap in”	[vo:fi 11 veĩ 31]	“to be bright”

[f] [v] が連続する母音の種類は多くはないが、[a] [eĩ] [ɔ] 母音の前で、[f] [v] は明らかに対立するから、2 音素 /f v/ を認める。そのほかに摩擦の弱い両唇摩擦音 [w] があらわれる。

[wu: 13 peĩ 31]	“belly”	[wu: 13 tu:fi 11]	“navel”
-----------------	---------	-------------------	---------

この [w] は [v] と補い合う分配を示していて、その関係を表にするとつぎのようになる。

	[i]	[eĩ]	[ɛ]	[a]	[U]	[oũ]	[ɔ]	[ɤ]
[v]	+	+	×	+	-	×	+	×
[w]	-	-	×	-	+	×	-	×

したがって、[w] は音素 /v/ が [#-U] の環境であらわれる変形とみなして差支えがない。

6) 鼻音 /ŋ m n/

標準的な有声鼻音 [ŋ] [m] [n] がつぎの例で観察できるが、これにあたる無声鼻音は出て来ない。

- | | | |
|-----|------------------------------------|-----------------------------------|
| [ŋ] | [ŋa:fi 66] “fish”, [ŋa 35] “bird”, | [ŋe:fi 33 veĩ 31] “to be short” |
| [m] | [ma:fi 55 veĩ 31] “to be many”, | [zɤfi 31 ma 35 veĩ 11] “to dream” |
| | [mɛ:fi 33 veĩ 31] “to be ripe” | |
| [n] | [na:fi 55 veĩ 31] “to listen” | [na 35 veĩ 11] “to be black” |
| | [nɛ:fi 33 veĩ 31] “to shake” | |

このほか [p] に対する [pʰ], [p'] に対する [p'ʰ], [b] に対する [bβ] と並行して, [m] に対して [mv] (正確には [mŋ]) が [ɤ] 母音と連続する形式にのみあらわれる。

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| [mvɤ:fi 66] “horse” | [mvɤ: ɔ pheĩ 55] “night” |
| [mvɤ: 33 veĩ 31] “to be tall” | [mvɤ:fi 31] “mushroom” |

[mv] はあきらかに [#-ɤ] の環境に限ってあらわれる [m] の allophone である。

また [n̥] 鼻音が [n̥i:fi 11 veĩ 31] “to look” [mvɤ:fi 55 n̥i: 11] “sun” に認められる。この [n̥] は [i] 母音と結合する形式に限られ、それに対立する [ni:] 形式は出て来ないから、[n̥] は [#-i] の環境で作られる [n] の allophone である。したがって、ラフ・シ語の鼻音には /ŋ m n/ の3音素をたてる。

7) 側面音 /l/

摩擦のない有声歯茎側面音 [l] のみが観察される。これは /ʔ/ とともに非統合音である。

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| [ʔɔfi 31 le:fi 55] “four” | [leĩ 11 veĩ 31] “to play” |
| [lo:fi 31 veĩ 11] “to bark”. | [lU:fi 31 veĩ 11] “to enter” |

これには音素 /l/ をたてて問題はない。

ラフ・シ語には、子音音素結合は全く認められない。¹⁹⁾

19) インフォーマントが示した Lahu alphabet に、以上の音素は、つぎのように該当する。

k	hk	g	g'	ng
/ k	kh	g	ɤ	ŋ /
c	ch	j		ny
/ ts	tsh	dz		n /
t	ht	d		n
/ t	th	d		n /
s	sh	z		
/ s	s	z /		
p	hp	b	m	f
/ p	ph	b	m	f /
y	r	l	v	h
/ z	×	l	v	h /

インフォーマントは r を [hara] とよんだが、[r] にはじまる形態素はラフ・シ語にはなかった。

4. 母音音素

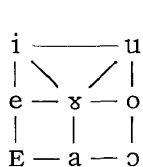
母音音素に関して、メーチャンのラフ・シ語のもっとも大きい特徴は、すでに指摘したごとく、普通母音と緊喉母音の2系列の対立が認められることであり、しかもその母音の性格をともしない得るトネームの種類の中に規則的な分配関係が成立する点にある。ただし、母音結合および鼻音化母音には緊喉母音はない。緊喉音は咽頭および喉頭をより緊張させて発出する母音であり、雲南省のハニ語、ラフ語、リス語などに認められることがすでに報告されている。タークのリス語にも同種の対立があった。

ラフ・シ語には、つぎのような対立例がある。

[ʔɔh 31 p' a 35] “leaf of three”	[tsa 35 veĩ 11] “to continue”
[p'a: 31 sa:fi 12] “religion”	[tsa:fi 13 veĩ 11] “to boil”
[mɛ 35 si 35] “eye”	[lɔ 53 sɔ 35] “bag”
[ʔɔfi 31 si: 13] “fruit”	[lɔ 53 sa:fi 13] “right hand”

これらの例から、ラフ・シ語にも緊喉母音と非緊喉（普通）母音二つの対立した母音音素を認めたい。この2系列の対立は、主に昇降型トーンにあらわれるから、この緊喉性をトネームの性格に帰着させて、トネームを5種類から7種類に増加し、この対立を解消することも記述法として可能である。²⁰⁾ しかし、[k'ɛ:fi 55] “dish” : [ʔɔfi 31 k'ɛ:fi 55] “excrement”, [k'a 55 tʃi:fi 11] “arrow” : [ʔɔfi 31 tʃi: 11] “pillar” のように平板型トーンにも緊喉音があらわれることと、リス語などとの並行性から、ラフ・シ語にも、この2系列の対立を設定した。この問題はなお検討すべきである。ここでは、音素表記上、両系列を弁別するために、非緊喉母音には /-h/ をつけてあらわした。²¹⁾ ラフ・シ語の母音音素目録はつぎのようになる。

非 緊 喉	ih	eh	Eh	ɤh	ah	uh	oh	ɔh
緊 喉	i	e	E	ɤ	a	u	o	ɔ



これらの母音は全体がととのった 2 + 3 + 3 の8母音システムをなしている。

これらの音素には、いろいろの環境においてつぎの音声該当する。/ih, i/ には [i] [I] [i̥], /eh, e/ には [eĩ], /Eh, E/ には [ɛ], /ɤh, ɤ/ には [ɤ] [ɤ̥], /ah, a/ には [a] [a], /u/ には [u] [U], /oh, o/ には [o] [oũ], /ɔh, ɔ/ には [ɔ] [ɔ̥] がそれぞれあたる。このうち、/ih/ と /ɤh/ について、説明を補足しよう。/ih/ は /k g ɣ ʔ/ と連続するとき、[i] の allophone の [i̥] 形をとる。[tʃu:fi 13 gi:fi 31] “saliva”, [mɛ 35 ɣ̥i:fi 31] “tear”, [ʔɔfi 31 ɣ̥i:fi 31] “sweat”, [ɣ̥i:fi 31 veĩ 11] “to laugh”, [ʔi: 11 veĩ 31] “to be big”。/ɤh/ は /dz/ のあとで [ɤ̥] あるいは [ɤ̥̥] に聞こえる。[dzɤ:fi 31] は [dz̥ɤ:fi 31] ま

20) しかし、もし register の対立がなければ、音節高トーンの弁別は5種類が限度であろう。

21) この緊喉母音の系列を、-ʔ をつけて表記することもできる。

たは [dz̥x̥ : fi 31] である。

これらの母音は、すでに例示したごとく、有声声門摩擦音 [h̥] をともなって発出されることが多い。それは録音テープを逆にして聞くと、たとえば [ah̥] は [fia] ~ [ha] となって、[h̥] または [h] を明瞭に聞きとることができる。

つぎに 8 母音の対立を示す例を左側にあげ、その右側に音素表記をつけた。

[mi:fi 55 veĩ 31] “to sit”	/mih-veh/
[meĩ: 55 veĩ 31] “to tame”	/méh-veh/
[mɛ:fi 55 veĩ 31] “to disappear”	/méh-veh/
[mɣ 33 veĩ 31] “to be tall” ²²⁾	/mɣh-veh/
[ma:fi 55 veĩ 31] “to be many”	/máh-veh/
[k'a: 11 mu:fi 55] “bread”	/khàh múh/
[mofi 31] ~ [moũ 31] “cloud”	/môh/
[mo:fi 31 veĩ 11] “to see”	/môh-veh/

もちろん、母音音素と子音音素の結合にはすき間がある。普通母音の系列では、そのすき間は規則だったものではないが、緊喉母音の場合には、かなりのすき間が認められる。たとえば、わたくしの資料では、k- kh- と母音音素の結合関係はつぎのようになる。

	/ ih	eh	Eh	xh	ah	uh	oh	ɔh /
/k/	+	+	+	+	+	+	+	+
/kh/	+	+	+	—	+	—	+	+
	/ i	e	E	x	a	u	o	ɔ /
/k/	--	--	--	+	+	+	+	+
/kh/	--	+	--	--	+	+	+	+

ラフ・シ語の全音節表を提出する必要がでてくるが、いまはこの問題にふれないでおく。

そのほか鼻音化母音がつぎの例で観察される。

[ēĩ]	[vēĩ 33] ~ [vĩ 33] “town”	[?ēĩ 55 veĩ31] “to lean”
	[?ɔfi 31 tʃ'ēĩ 55] “vegetable”	[li 11 hēĩ 55 veĩ 31] “to learn”
[ũ]	[?ɔfi 31 tʃũ 11] “body”	[ɣʷi: 31 pu 55 lũ: 13] “lake”
[ɔ]	[hɔ: 33 mɛfi 11] “stone”	[su 33 tɔ: 33 veĩ 31] “to pray”
	[mvx:fi 55 hɔ: 11] “wind”	[?afi 33 tʃɔ: 31] “umbrella”
[ã]	[?afi 33 lâ: 13] “flag”	

鼻音化母音があらわれるのは、ビルマ語からの借用語であることが多い。そして、この鼻音

22) これに対して [mo:fi 55 veĩ 31] “to be high” の形式も並存する。

化母音が普通母音と自由交替する形態素も少なくない。²³⁾ [pa: 11 ka:fi 55] “jaw” は 3 度のうち 2 度が [pa: 11 kã: 55] となった。同じようにつぎの例がある。

[ʔɔfi: 31 la: 13] ~ [ʔɔfi 31 lâ: 13] “horse saddle”

[ʔa: 55 veĩ 31] ~ [ʔã: 55 veĩ 31] “to surprise”

[fo: 13 veĩ] ~ [fõ: 13 veĩ 11] “to wrap in”

[su: 33] ~ [sũ: 33] “iron”, [ɣo:fi 33 veĩ 31] ~ [ɣõ: 33 veĩ 31] “to read”

[ho: 55 veĩ 31] ~ [hõ: 55 veĩ31] “to dye”

一方では、普通母音と鼻音化母音は、はっきりと対立している。

[tʃõ: 11 ja: 55] “student” : [tʃ'õ: 11 ja: 55] “child”

[ʔɔfi: 31 lõ: 33] “story” : [ʔɔfi: 31 lo: 33] “east”

したがって、共通する鼻音化現象を /n/ 音素に該当する単位とみなして、これらを /in, on, ɔn, an/ によって表記する。

母音音素結合 /ai oe ɔe/

ラフ・シ語には、なお降り型 2 重母音が観察される。

[aĩ] [kaĩ 31 veĩ 11] “to go” [pa: 11 taĩ 55] “rabbit”

[paĩ 11 veĩ 31] “to fall down” [kɔ 35 faĩ 35] “match”

[naĩ 33 veĩ 31] “to cure” [laĩ 33 tsu 11] “leopard”

[aě] [na: 31 pa: 11 laě 13] “sea” [vaě 33 veĩ 31] “to be fast”

[maě 13] “mark” [ɲaě 33 veĩ 31] “to be easy”

[aĩ] [aě] は、いずれもビルマ語、タイ語からの借用形式が多い (Bur. : pinle “sea”, a hma? “mark”, N. Thai : kàtaaj “rabbit”, ka faj “match”)

この [aĩ] と [aě] は対立する形態素をもたないから、一種の /ai/ で表記することにする。

[oě] [k'a: 33 poě 31] “all”

[toě 35 veĩ 11] “to light a candle”

[ɔě] [poě 55 veĩ 31] “festival” (< Bur. pwê)

[k'ɔě 13 veĩ 11] “to envy”

この二重母音は /o/ /ɔ/ が /e/ /E/ と結合した単位と認めて、/oe/ /ɔE/ の母音結合をたてる。/ɔE/ は便宜的に /ɔe/ で表記する。

また、つぎのような疑似的な二重母音がある。[ha e veĩ] “to be foolish”, [ko e veĩ] “to return”, [to e veĩ] “to go out”, [bo e veĩ] “to be round”。これらは、ある状態を示す形態素 {-e-} を挿入した複合形式であるから、それぞれ/ha-ʔe-ve/ /ko-ʔe-ve/ /to-ʔe-ve/ /bo-ʔe-ve/

23) そのほか、後続鼻音によって [ʔɔfi31-] が同化され [ʔõ: 31-] となる例がある。[ʔõ: 31 mĩ: 55 ma 11] “wife”, [ʔõ: 31 na13 ma13] “younger sister”

と表記する。diminutive suffix の {-ʔE} をともなう複合形式 [ʔɔfi 31 bɔːɛ 35] “room” も同じように /ʔɔh-bɔh-ʔEh/ と表記する。

以上の結果、ラフ・シ語の母音体系は、8種の普通母音と8種の緊喉母音とそのほかに、4種の鼻音化母音と3種の母音結合からなっていると言することができる。²⁴⁾

ラフ・シ語には、長母音と短母音の職能的な対立は全体として成立しないが、ただ緊喉母音は非緊喉母音より短く発音される一般的な現象は認められる。

5. 以上ラフ・シ語の音素構造をトネーム、子音音素、母音音素の諸体系を中心にその特徴を記述した。その記述は、原則的にすでに発表した「ビス語の研究」「アカ語の音素体系」および「リス語の研究」において試みた方法にしたがっている。解説にあたってそれらの論文とかなり重複したところが出て来たが、統一した方法を用いて、いくつかの言葉を記述することは、その結果を比較対照し、言語類型学的考察を加えるにあたって、有用であるが、ことにビス語、アカ語、リス語、ラフ語のように系統的に近い言葉においては、それぞれの言葉の詳細な特徴点を知るうえでも、極めて有効であると思う。

III ラフ・シ語（メーチャン）の文法体系

1. メーチャンのラフ・シ語は、すでにまとまった報告のあるビルマのケントゥン近辺に分布するラフ・ナ語やタイ国チェンマイ県ドイ・チェン・ダオのラフ・ナ語とは、文法体系や語彙形式に、細部の点でかなり相違がある。つぎにラフ・シ語の文法体系を簡略に記述する。文法体系および語彙形式の異同については、別論「ラフ語比較文法」にゆずりたい。

2. ラフ・シ語の単純単語は、一つまたは二つあるいはそれ以上の形態素の結合からできている。その中で、二つ以上の形態素からなる単純単語がもっとも頻度が多いが、なかでも核形態素とそれに先行する ʔɔh- または ʔah- の連続かあるいは核形態素とそれに付随する -veh の連続である場合がもっとも多い。

ʔɔh-	ʔah-	-veh
ʔɔh-mə̀h “beard”	ʔah-kòh “head”	zə̀-veh “to sleep”
ʔɔh-să “flesh”	ʔah-ɣô “needle”	kùh-veh “to cry”
ʔɔh-zə̀h “seed”	ʔah-poh “shirt”	lòh-veh “to bark”

24) インフォーマントがあげた Lahu alphabet に上述のラフ・シ語の母音音素はつぎのように該当する。

i /i ih/	e /e eh/	eh /ɛ Eh/
ui /ih/ [i:]	e /e eh/	uh /ɤ ɤh/
u /u. uh/	o /o oh/	aw /ɔ ɔh/
ai /ai/	ao	a /a ah/

ao を含む形式は、わたくしの資料にはない。

これらの例から明らかなごとく、 ʔ^{h} - または ʔ^{ah} - を先行する単語は名辞表現であり、 $-\text{veh}$ をともなう形式は、つねに動辞表現である。同じ主核形態素が ʔ^{h} - または ʔ^{ah} - を先行する形式と $-\text{veh}$ をともなう形式を共にもっている例ももちろん少なくはない。

prefix + 核形態素	核形態素	核形態素 + suffix
ʔ^{h} ɣuh “egg”	ɣuh	ɣuh-veh “to lay an egg”
ʔ^{h} ph^{h} “group”	ph^{h}	$\text{ph}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to collect”
ʔ^{h} v^{h} “flower”	v^{h}	$\text{v}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to blossom”

この形態がラフ・シ語における単語構成法の基本的な特徴である。この点リス語と極めてよく並行している。この prefix + 核形態素の名辞表現をいわゆる Cognate Object として、それに suffix をともなう動辞表現を結び付けた単語構成法もある。 $\text{ʔ}^{\text{h}}-\text{ɣuh}$ ɣuh-veh “to lay an egg”, $\text{ʔ}^{\text{h}}-\text{v}^{\text{h}}$ $\text{v}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to blossom” といい得る。同じように、 $\text{ʔ}^{\text{h}}-\text{l}^{\text{h}}$ $\text{l}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to doubt” $\text{ʔ}^{\text{h}}-\text{kh}^{\text{h}}$ $\text{kh}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to bloom” などこの形態素連続はよく使われる。

ラフ・シ語には、いま一つ明瞭な単語構成法がある。それは行為を表現する形式と、行為に使う道具を表現する形式の対立をあらわす手順である。換言すると、動辞表現と、それに該当する名辞表現<道具名詞>が形式のうえで弁別され、つぎのような productive な手順で形成される。ラフ・シ語には、リス語のような行為者を表現する形式がこれに加わらない。

核形態素 + veh	核形態素 + tûh
行為動詞	道具名詞
$\text{ph}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to fan”	$\text{ph}^{\text{h}}-\text{tûh}$ “a fan”
$\text{ɣ}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to oar”	$\text{ɣ}^{\text{h}}-\text{tûh}$ “an oar”
$\text{s}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to erase”	$\text{s}^{\text{h}}-\text{tûh}$ “an eraser”
$\text{th}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to dig”	$\text{th}^{\text{h}}-\text{tûh}$ “shovel”
$\text{l}^{\text{h}}-\text{veh}$ “to play”	$\text{l}^{\text{h}}-\text{tûh}$ “toy”

ラフ・シ語では、 $-\text{tûh}$ をともなう形式には prefix ʔ^{h} - は普通はつかない。この $-\text{tûh}$ をともなう単語も、 $\text{ɣ}^{\text{h}}-\text{tûh}$ $\text{ɣ}^{\text{h}}-\text{veh}$ “(舟を)こぐ”, $\text{ts}^{\text{h}}-\text{tûh}$ $\text{ts}^{\text{h}}-\text{veh}$ “食べるべきものを食べる=食べる”, $\text{ts}^{\text{h}}-\text{tûh}$ $\text{ts}^{\text{h}}-\text{veh}$ “煮るべきものを煮る=煮る”のように連続する構成もある。このあとの場合は、複合単語として扱ってよいであろう。

ラフ・シ語の複合形式は、リス語に比べてはっきりしていて、分析し易い。いま代表的なタイプをあげると、つぎのようになる。

タイプ 1

$\text{ɳ}^{\text{h}}-\text{m}^{\text{h}}$ “fish” + $\text{ʔ}^{\text{h}}-\text{m}^{\text{h}}$ “tail” → $\text{ɳ}^{\text{h}}-\text{m}^{\text{h}}$ “fish tail”

タイプ 2

$\text{ʔ}^{\text{ah}}-\text{p}^{\text{h}}$ “bee” + $-\text{ɣ}^{\text{h}}$ “water” → p^{h} + ɣ^{h} “honey”

-yîh “water” は, ?ah-kă “water” に対して, つねに複合形式にあらわれる。cf. tsŭh + yîh “saliva”

タイプ 3

môh^{N1}-kôh^{N2} “mouth” + ?ôh-yîh^{N3} “skin” → môh^{N1}-kôh^{N2} + yîh^{N3} “lip”

タイプ 4

sŭ^{N1}-tsê^{N2} “tree” + ?ôh-yîh^{N3}-kŭ^{N4} “skin” → sŭ^{N1} + yîh^{N3}-kŭ^{N4} “bark of tree”

タイプ 5

mĕ^{N1}-sîh^{N2} “eye” + ?ôh-yîh^{N3}-kŭ^{N4} “skin” → mĕ^{N1} + kŭ^{N4} “eye-lid”

このほかに、なお別のタイプは予測できるし、容易に分析し難い複雑な複合形式もある。mŭh nă sĕ yîh dôh-veh “rainbow” は mŭh / nă / sĕ / yîh / dôh-veh/ と分析できて、“天が濁き水を飲む”の意であることがわかるが、この nă の意味が明瞭ではなく、/mŭh nă/ とすべきか /mŭh / nă/ であるのか判断し難い。ちなみに、モソ語では、“虹”は“天の舌が水を飲む”とか“火の舌が水を飲む”という意味で表現される。ラフ・シ語と非常に近い。

3. 等式文と叙述文——肯定形式・否定形式・発問形式

ラフ・シ語の文は、リス語などと同じように、等式文と叙述文に大別できる。この二つの文のタイプは、それぞれ特有の否定形式をもつほかに、つぎの点で区別される。等式文は基本的には、二つの名辞表現から成りたち、丁寧な発話では、その二つの名辞表現の間に休止がおかれる。叙述文は基本的には形態素 -veh に終わるか、あるいはその位置に入れ替わり得る付属形態素に終わる動辞表現と、それに先行する名辞表現から成りたつ。これも丁寧な発話では名辞表現と動辞表現の間に休止がおかれる。

等式文

ŋâh lĕh # 名辞表現 # <私は……である>

ŋâh lĕh # lăh hùh sîh tshóh <私はラフ・シ人である>

この lĕh は、主格を示す助辞であり、それをともなわない ŋâh # lăh hùh sîh tshóh でも等式文は成りたち、また文の終わりに -phĕh-veh を加えて、

ŋâh # lăh hùh sîh tshóh phĕh-veh

ŋâh lĕh # lăh hùh sîh tshóh phĕh-veh でも成りたつ。(この -phĕh-veh は、ビルマ語の phrac-se /phyitee/ に該当する)

ŋâh lĕh # 名辞表現 ma hĕ # <私は……ではない>

ŋâh lĕh # lăh hùh sîh tshóh ma hĕ # <私はラフ・シ人ではない>

この lĕh も肯定形式の場合と同じ扱いを受けるが、肯定形式の -phĕh-veh は否定形式には用いられず、-ma hĕ が使われる。これは、ビルマ語の -phyitte が、否定形式では -ma hou? に置き換えられる事実とよく並行する。

この ma hE は [mə¹¹ hɛ:[?] 11] の音声形式をとることが多い。

叙 述 文

ŋâh # 動辞表現 (-veh) # <私は……する>

ŋâh # lâh-veh # <私は来る>

ŋâh # ma 動辞表現 # <私は……しない>

ŋâh # ma lâh # <私は来ない>

等式文も叙述文も発問形式に換えるには、三つの手順がある。

i) 高い昇降型語調を加える。ii) 肯定形式と否定形式をつづけて並べる。iii) 発問助辞 lâh または -lêh を加える。

i) # lâh hùh sìh tshóh <ラフ・シ人です>

→ lâh hùh sìh tshóh [451] <ラフ・シ人ですか>

ii) → lâh hùh sìh tshóh hE ma hE <ラフ・シ人ですか>

iii) → lâh hùh sìh tshóh lâh <ラフ・シ人ですか>

i) # lâh-veh <来る> → # lâh-veh [451] <来るか>

ii) → # lâh ma lâh <来るか>

iii) → # lâh veh lâh <来るか>

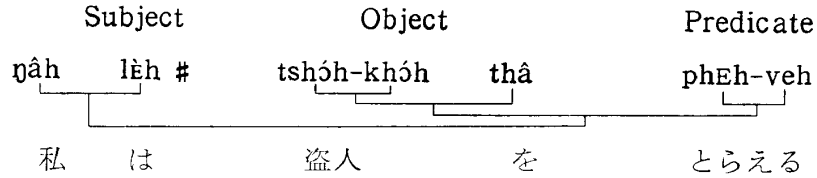
発問形式では phE-ma hE とはならず、hE ma hE である。ビルマ語の hou[?] ma hou[?] と並行する。-lâh は発問助辞であり、疑問辞を含む文にあらわれる -lêh と補い合う関係にたち、ビルマ語の -lâ~-lê と同じ分布を示している。lêh についてはあとで述べる。

等式文の名辞表現の環境に入り得る形態素を group S の形態素、叙述文の動辞表現の環境に入り得る形態素を group V の形態素とよぶことにする。そして ŋâh の位置に替わり得る形態素も group S, ma に替わり得る形態素は、このほかには見出せないが、-veh に替わり得る形態素はいくつかあって、ma-, -veh とつぎに述べる別の一類をまとめて、group E とする。ラフ・シ語の形態素は、この3類 group S, group V, group E に大別できる。

4. ラフ・シ語で主格が lèh によって表現されることは、うえにあげた諸例によってわかるが、つぎのように、主格 <…は>, 対格 <…を> の関係がもっぱら形態素の意味と語順によって理解させられるときも多い。

Subj.	— Object —	Pred.	
ŋâh #	nă-tsŷh	dôh-veh	<私(は)薬(を)のむ>
ŋâh #	zêh	tè -veh	<私(は)家(を)建てる>
ŋâh #	?òh	tsáh-veh	<私(は)ご飯(を)食べる>
ŋâh #	zâh-kóh	tuh-veh	<私(は)道(を)歩く>

これらの例では object は日本語の <…を> にあたる形態素によって明示されることがないが、つぎの



のような例では、目的語は -thâ <…を> によって明確にされている。

この種の関係をあらわす形態素をあげると、つぎのようになる。つまり叙述文の基本形式は、つぎのように拡張され得る。

- | | |
|---------------------------------|-------------------|
| i) ŋâh (lèh) # S thâ V-veh | <私 (は) ……を……する> |
| ii) ŋâh (lèh) # S lǒh V-veh | <私 (は) ……から……する> |
| iii) ŋâh lǎh S # V-veh | <私と……は……する> |
| iv) ŋâh (lèh) # S ?ah-kǎh V-veh | <私 (は) ……より……である> |
-
- | | |
|-------------------------------------|---------------|
| i) ŋâh (lèh) # khǎ tshih thâ tǎ-veh | 私 (は) この弓を作る。 |
| # né thâ tǎh kóh | 精霊を怖れるな。 |

この thâ は、日本語の <…を> にあたるほかに、ŋâh # mih-khóh thâ mih-veh <私は椅子に坐る>、zóh thâ tǎh kǎ <彼に言うな> のように <…に> に該当する場合もある。後者は、ラフ・シ人の考えでは、<椅子を坐る>、<彼を言う> として把握されているからである。なおまた thâ は、mǎh thâ tsE-veh <馬から落ちる> の例のように、日本語の <…から> にもあたるが、これもこの現実をラフ・シ人は <馬を落ちる> と表現したためである。

- | | |
|--|--------------|
| ii-a) ŋâh (lèh) # kúh thêh lǒh lâh-veh | <私はバンコクから来た> |
| ii-b) ŋâh (lèh) # kúh thêh lǒh kǎi-veh | <私はバンコクへ行く> |

この lǒh は出発点あるいは目的地の方向を示す形態素であるために、日本語の <…から> と <…へ> の両方に該当する。またつぎのような <…から> の意味にもあたる。

tsǎh tshih # kǎ lǒh té-veh <この酒は何から作ったか> これは、また <何において作ったか> と表現されているとも考えられる。この lǒh が、場所を示す於格のはたらきをし、いわゆる存在文において頻繁に見られるからである。

sǎ tsê ?ǎh-kǎ lǒh ŋǎ sǎh khêh tshôh-veh <樹の枝に鳥が3羽とまっている>

この lǒh はさらに、khòh-lǒh <…の中に>、thâ lǒh <…の上に>、?ǎh hǎ lǒh <…の下に>、pǎ lǒh <…のそばに> と複合される。

- | | |
|----------------------------------|------------------|
| mêh tshán khòh-lǒh zǎh tshôh-veh | <メーチャンの町には市場がある> |
| zêh khò-lǒh mih khóh tshôh-veh | <家の中には椅子がある> |

- sǎ tsêh ʔôh-hǒ lǒh ʔôh pǎh-màh tshôh-veh <樹の下には虫がいる>
 iii) ɲâh lǎh nǒh # kài-veh <私とあなたは行く>
 ɲâh lǎh zǒh # lǎh-hùh tshóh <私と彼はラフ人である>
 lǎh-hùh tshóh-tsêh lǎh ʔah-khàh tshóh-tsêh <ラフ族とアカ族>

ラフ・シ語では、日本語の <私はあると……する> に該当する表現は、<私とあなたは…
 …する> として表現されることが多い。

- iv) ɲâh ʔah kéh nǒh ʔah-sǎ ʔui-veh <私よりあなたは年がっている(歳が多い)>

この ʔah-kéh は “more than” を意味し、さらに程度が高い場合には ʔah-kéh líh lǎh <…
 …よりずっと……> の連続が認められる。ここでも、ラフ・シ人は <私はあるより……>
 というとらえ方をしないで、<私よりあなたは……> と表現するのが普通である。

ラフ・シ語の属格 <…の> は、-veh で表現される。補注2 (p.34)

- v) S veh S # V-veh <……の……は……である>
 sǎ-tsêh veh ʔôh kǎ # ji-veh <(この) 樹の枝は小さい>
 sǎ-tsêh veh ʔôh phá # nih-veh <(この) 樹の葉は紅い>

これは複合単語形式、sǎ-tsêh ʔôh kǎ, sǎ-tsêh ʔôh phá に対立する構成であって、ラフ・シ
 語は、動詞につく suffix と genitive を表現する suffix が同じ形式をもつ言語群 (ビルマ語、
 アカ語など) に属していることがわかる。人称代名詞の属格などについてはのちに述べる。(cf.
 p. 26)

以上の関係を表現する付属形態素をまとめると、つぎのようになる。

-lǎh	主格	-thâ	対格	-veh	属格
-lǎh	連格	-lǒh	於格, 従格		

これらの形態素はすべて、さきに掲げた ma, -veh と同じ group E に属させる。上掲の諸
 例でわかるように、これらの形態素の意味職能は日本語の助辞とも一致しないし、ビルマ語の
 助辞とも違っている。たとえば、ラフ・シ語の同じ一つの -lǒh は、ビルマ語の kou <……
 …へ>, ka <……から>, hma <…に> と対照される。

Lahu Shi	Burmese
mèh tshán-lǒh kài-veh : mei chan gou thwâ-me	<マーチャンへ行く>
mèh tshán-lǒh lâh-veh : mei-chan gâ la-de	<マーチャンから来た>
mèh tshán khòh-lǒh zǎh tsôh-veh :	
	mei chan myòu thê -hma zêi ši-de
	<マーチャン(の町)に市場がある>

上にあげた叙述文 i) は、なお一つの補語を含んだ場合、つぎのように拡張される。

- vi) $\eta\acute{a}h \# S \ th\acute{a} \ S \ V\text{-}veh$ <私は……に……を……する>
 $\eta\acute{a}h \# \eta\acute{a} \ z\grave{e} \ th\acute{a} \ lih \ b\grave{e}h \ f\acute{e}h\text{-}veh$ <私(は), 私の母に, 手紙(を) 書き送る>
 $\eta\acute{a}h \# \eta\acute{a} \ n\grave{a}h \ th\acute{a} \ lih \ k\ddot{o} \ tshih \ p\acute{i}h\text{-}veh$ <私(は), 私の弟に, この書物(を) あげる>

いわゆる直接補語には, 特定の助辞がつかない。

ここで動辞表現の受動形式について述べておきたい。ラフ・シ語にはリス語とは違って, はっきりとした受動形式がある。しかし, これはあまり使われず, あるいはビルマ語の影響のもとに形成された表現形式である可能性もある。

主動形式 Subj. + Obj. (thá) + V-veh

受動形式 Obj. + Subj + V-veh thá + yàh khàh-veh

- $\eta\acute{a}h \# n\acute{o}h \ th\acute{a} \ d\ddot{o}\text{-}veh$ <私(は) あなたを打つ>
 $n\acute{o}h \# \eta\acute{a}h \ d\ddot{o}\text{-}veh \ th\acute{a} \ y\grave{a}h \ kh\grave{a}h\text{-}veh$ <あなた(は) 私に打たれる>
 $\eta\acute{a}h \# y\grave{a} \ s\grave{a}h \ ts\acute{a}h\text{-}veh$ <私(は) 鶏肉をたべる>
 $y\grave{a} \ s\grave{a}h \ \# \eta\acute{a}h \ ts\acute{a}h\text{-}veh \ th\acute{a} \ y\grave{a}h \ kh\grave{a}h\text{-}veh$ <鶏肉(は) 私にたべられる>

主動形式から受動形式への転換は, Subject と Object の語順を置き換え, 対格助辞 thá を, 動辞表現+付属形態素 -veh のあとに移して, yàh (得る) khàh (受ける) -veh を接続して作られる。[cf. Bur. yaitte <打つ> : ?ayai? khan-yà-de <打たれる> khan (受ける) yà (得る)]

5. Group S の形態素のうち, $\eta\acute{a}h$ と直接交替する関係にある人称代名詞類は, つぎの体系をもっている。

- | | | | |
|--------|------------------|-----|-------------------------------------|
| 1) sg. | $\eta\acute{a}h$ | pl. | $\eta\acute{a}h\text{-}h\acute{i}h$ |
| 2) sg. | $n\acute{o}h$ | pl. | $n\acute{o}h\text{-}h\acute{i}h$ |
| 3) sg. | $z\acute{o}h$ | pl. | $z\acute{o}h\text{-}h\acute{i}h$ |

複数形式は, 単数形式に, 付属形態素 hih をつけて形成される。ラフ・シ語では, ほかの名辞表現にもこの hih がつけられて, 複数範疇が成立する。ただ, この hih は生物をあらわす形式のみにつけられて, 無生物には使えない。無生物には, máh が用いられる。

- $tsh\acute{o}h$ <人> → $tsh\acute{o}h \ h\acute{i}h$ <人々>
 $y\grave{a}\text{-}ma$ <鶏> → $y\grave{a}\text{-}ma \ h\acute{i}h$ <鶏(pl.)>
 $s\check{s} \ ts\acute{e}h$ <樹> → $s\check{s} \ ts\acute{e}h \ m\acute{a}h$ <樹(pl.)>

また, この máh は $m\acute{a}h \ m\acute{a}h$ と重複されることも多い。 $s\check{s} \ ts\acute{e}h \ m\acute{a}h\text{-}m\acute{a}h \ tsh\acute{o}h\text{-}veh$ <多くの樹がある>, (cf. Bur. lu “man” → lu dòu, lu mjá “men”, θ ippin “tree” → θ ippin mjá, θ ippin mjá mjá “trees”).

人称代名詞の双数形式はないが, 1人称代名詞複数の包括形として, $\eta\acute{a}h \ h\acute{i}h \ k\grave{a} \ p\acute{o}e$ (私たちすべて) を使うことがある。

つぎに *ŋâh # kán tè-veh* <私は仕事をする> は, *ŋâh ?əh-tòh # kán tè-veh* <私自身が仕事をする> になる。このあとの形式は, *ŋâh* <私> と *?əh-tòh* <身体> からなる複合語であるが, これに該当する 2 人称, 3 人称にはつぎの形式がある。(cf. Lisu. *ko-dèh*, Bur. *-kou-dain* “one’s self”)

sg. (1) *ŋâh ?əh-tòh* (2) *nôh ?əh-tòh* (3) *zôh ?əh-tòh*
 pl. (1) *ŋâh hih ?əh-tòh* (2) *nôh hih ?əh-tòh* (3) *zôh hih ?əh-tòh*

等式文の基本型, *zôh # tshóh dâh* <彼はよい人間である> にあたる叙述文は, *zôh # dâh-veh* <彼はよい> である。この文は, さらに *zôh-veh # dâh-veh* <彼のものはよい> になり得る。この *zôh-veh* にあたる人称形式は, つぎのごとくである。

sg. (1) *ŋâh-veh* (2) *nôh-veh* (3) *zôh-veh*
 pl. (1) *ŋâh hih-veh* (2) *nôh hih-veh* (3) *zôh hih-veh*

この *-veh* は, 上述のようにほかの名辞表現と接合して属格を示す助辞であった。人称代名詞の属格形は特別な形式で拡張されないことと, 名辞表現につく *-veh* には <…の> と <…のもの> の二つの意味が含まれていることがわかる。

6. ラフ・シ語の指示詞の体系は, つぎのようになっている。

sg. *tshih* 近称 *?ö* 遠称
 pl. *tshih tēh pha* 近称 *?ö tēh pha* 遠称

ラフ・シ語は, 近称と遠称の 2 種類であって, 最遠称はない。この形式が名辞表現を限定するときには, 名辞表現のすぐあとにおかれた。(cf. p. 38)

sě tsêh <樹> → *sě tsêh tshih* <この樹>
tshóh <人> → *tshóh ?ö* <あの人>
vú-tsəh tshih # pih-veh <この帽子は古い>
vú-tsəh ?ö # səh-veh <あの帽子は新しい>

指示詞の基本形は, また場所を表現するとき *-löh* がつけられる。この *-löh* は, 先に述べた <…で> を意味する於格を示す形態素と同じである。

ŋâh # tshôh löh mih-veh <私はここに坐る>
ŋâh # ?ö löh mih-veh <私はあそこに坐る>
ŋâh # ?ö tshôh löh mih-veh <私はずっとあちに坐る>

ここでは, 最遠称に類する形式が, 近称と遠称の結合形としてでてくる。近称の形式は *-löh* との結合では, *tshôh-* に替わる。これは, リス語で *thi-?uà* <ここ> よりも *thóh-?uà* <ここ> のほうがよく使われるのと似ている。

<今年> *tsih nih khǒ* は <この・年・歳> と分析できる。したがって, ラフ・シ語には <この> は *-tshih*, *tsih-*, *tshôh-* と 3 形式があって, 補い合って分配していることになる。

指示詞の基本形にも -veh が接続されて、〈…のもの〉を指す形式が構成される。

tshih-veh # pih-veh 〈これは古い〉
 ?ö-veh # sǎh-veh 〈あれは新しい〉

そのほか指示詞の基本形には -kè がつき得る。tshih kè tè-veh 〈このようにする〉 ?ö kè tè-veh 〈あのようにする〉。

人物、事物、時間、場所、数などの発問はつぎの形であらわされる。

[人物] ?ah-sùh 〈誰〉 [事物] ah thò màh 〈何〉
 [時間] khah-tháh 〈いつ〉 [場所] khah-lǒh 〈どこ〉
 [数] khah màh 〈いくつ〉 [事由] ?ah-tho tè léh 〈なぜ〉
 [様式] khah kè 〈どのように〉

これらの形式は、発問助詞 -léh をともなって、叙述文を構成する。

?ah-tho mah léh 〈何ですか〉, ?ah-sùh léh 〈誰ですか〉
 khah lǒh léh 〈どこですか〉, khàh màh víh-léh 〈どれくらい遠いですか〉,
 khah-lǒh kài-veh léh 〈どこへ行くのですか〉,

この -léh は、上述の -láh と補い合う関係にたつ発問助詞である。(cf. p. 22)

[時間] の tháh, [場所] の lǒh, [様式] の kè を分離できるから、発問詞の基本形は、?ah-sùh 〈誰〉, ?ah-tho 〈どれ〉, màh 〈いくつ〉, khah 〈何〉 の4種になる (cf. リス語 ?a-ma 〈誰〉, ?a-ši 〈何〉, ?a-li 〈どれ〉, ?a-mia 〈いくつ〉: ビルマ語 ba 〈何〉, bay bê 〈どれ〉)。

7. 以上に述べた人称代名詞、指示詞、発問詞のほか、Group S としてまとめ得る単語は、形式の上からつぎの7類に分けることができる。

(1) prefix あるいは suffix をもたない形式, (2) prefix ?ôh- をともなう形式, (3) prefix ?ah- をともなう形式, (4) suffix -ma,-pa をともなう形式, (5) suffix -mih,-pa をともなう形式, (6) suffix -nEh をともなう形式, (7) suffix -tûh をともなう形式

つぎに各形式について説明を加える。

(1) prefix あるいは suffix をもたない形式

i) 1形態素から成る単語

tsîh “tooth”, khíh “foot” ñáh “fish”
 zǎh “wine” zêh “house” khǎ “crossbow”

ii) 2形態素から成る単語

hàh líh “tongue” pàh lǒ “cheek” môh khuh “pot”
 vî káh “clothes”

iii) 3 形態素から成る単語

lâ sîh kǔ “nail” héh pih khóh “forest”
 pih gah leh “spider”

4 形態素からなる nàh khèh kǔ kùh “knee” は、おそらく nàh khèh と kǔ kùh に分析できる複合単語であろう。

(2) prefix ?ôh- をともなう形式

さきに述べたように、prefix ?ôh- は <事物の名前あるいは事柄> を示す職能をもっている。

?ôh-khóh “voice” ?ôh-tòh “breast” ?ôh-sàh “flesh”
 ?ôh-khòh “year” ?ôh-mǎh “beard”

また、状態をあらわす単語から事柄を示す単語を形成する場合に、この prefix が使われる。

nih-veh <赤い> → ?ôh-nih <赤さ>
 phih-veh <青い> → ?ôh phih <青さ>
 puh-veh <白い> → ?ôh puh <白さ>

(3) prefix ?ah- をともなう形式

この形式の単語には、かりに四つの範疇をたてることができるが、厳密な分類ではない。

i) 動物の名前、鳥類が多い。

?ah-pêh “duck” ?ah-tsê “eagle” ?ah-pǐh “insect” ?ah-péh “bee”

ii) 親属名称

?ah-zé “mother” ?ah-nǎh “younger brother” ?ah-píh “grandmother”
 ?ah-pǔh “grandfather”

iii) 器物の名称

?ah-tsǒh “umbrella” ?ah-γô “needle” ?ah-kóh “bottle”
 ?ah-téh “sword” ?ah-nǎ “gun”

iv) その他

?ah-mih “fire” ?ah-sǎ “age” ?ah-tshúh “thorn” ?ah-nǎh “disease”

prefix ?ôh- と ?ah- の職能の違いは必ずしも明瞭ではない。

(4) suffix -pah, -mah, -mih をともなう形式

-pah は、人間および動物一般の男性を示し、-mah, と -mih は補い合って、-mah は人間以外の動物の女性を、-mih は人間の女性をあらわす。

i) -pah : -mah.

γǎ-pah <雄鶏> γǎ-mah <雌鶏>
 vâ-pah <雄豚> vâ-mah <雌豚>
 mǎh-pah <雄馬> mǎh-mah <雌馬>

ii) -pah : -mih

záh-pah <息子> záh-mih <娘>
 ?ǝh-hɔ-?éh pah <孫> ?ǝh-hɔ-?éh mih <孫娘>

sa làh pah <男教師> に対する sa làh mah <女教師> は、ビルマ語からの借用であろう。

男性を示す -pah は、つぎのような連続でもあらわれる。

tih mih tè-veh <耕す> → tih mih tè-pah tshóh <百姓>
 ta kâh tè-veh <商売する> → ta kâh tè-pah tshóh <商売人>

(5) suffix-nEh をともなう形式

nEh は本来 <小さい> を意味するが、名辞表現に接尾して指小形式 (diminutive) を構成する。

ŋǎ <鳥> → ŋǎ-nEh <小鳥> mǝ <草> → mǝ nEh <小さい草>
 phih <犬> → phih nEh <小犬> mô <猿> → mô nEh <小猿>
 táh kùh <箱> → táh kùh nEh <小箱> ?ah-kóh <瓶> → ?ah-kóh nEh <小瓶>

(6) suffix-tûh をともなう形式

この suffix が、動辞表現 V-veh 形式の -veh の位置に換わって、その行為に用いる道具を示すことは、すでに例をあげた (p. 20)。そのほかに、いわゆる動名詞を構成する職能がある。

lâh-veh <来る> → lâh-tûh dâh-veh <来ることはよい>
 kâi-veh <行く> → kâi-tûh dâh-veh <行くことはよい>

動作を表現する単語と状態を表現する単語は、ラフ・シ語ではよく似た職能をもっている。

たとえば、 lâh-veh → lâh-veh tshóh <来る人>
 dâh-veh → dâh-veh tshóh <好い人>

そのため、この二つを共に動辞表現として扱った。しかし、それを名辞表現に転換するときには、状態をあらわすほうは、上述のように ?ǝh- を前接して、dâh-veh から ?ǝh-dâh (よいこと) を構成し、動作をあらわすほうは、この suffix-tûh を接尾して lâh-tûh <来ること> を構成した。この点で、状態と動作の形態素の職能は相違している。

(7) suffix-?Eh をともなう形式

上述の suffix-nEh とともに、この -?Eh <愛くるしい?> も指小形式を構成する。

zôh <羊> → zôh ?éh <小羊> のような例のほかは、指小形式でない形式が使われないところに特徴がある。

ʔəh-bo-ʔéh <部屋>, ʔəh-ho-ʔéh <孫>, nəh-mǐh kho-ʔéh <ねこ>。これは、指小形式に对立してむしろ表愛形式というべきかもしれない。

8. Group S の単語の中で、はっきりとした体系をもつものに数詞がある。ラフ・シ語の数詞はつぎの形式をもっている。

1 té màh	2 níh màh	3 sèh léh
4 ʔəh léh	5 ɲáh màh	6 kho màh
7 sǎh màh	8 hǐh màh	9 kòh léh
10 té tshih	11 tshih té	12 tshih níh
13 tshih sèh	14 tshih ʔəh	15 tshih ɲáh
16 tshih kho	17 tshih sǎh	18 tshih hǐh
19 tshih kóh	20 níh tshih	30 sèh tshih
40 ʔəh tshih	50 ɲáh tshih	60 kho tshih
70 sǎh tshih	80 hǐh tshih	90 kóh tshih
100 tih hàh	1,000 tih hǐ	10,000 tih tshih hǐ

ラフ・シ語の数詞は、リス語などと同じく、10進法をとり、たとえば12は10+2のごとく、上位の桁と下位の桁の数詞が直接に連結して、その間に別の形態素は挿入されない。1には té と tih の2形式があり、10には声調の違う tshih と tshih̄ がある。しかし、これらは同じ環境には用いられず、tih, tshih の分配範囲はごく限定されている。tih は、100, 1,000, 10,000 に限られ、tshih̄ は先行する形態素が低平型声調をとるときにのみあらわれる。したがって、té, と tih, tshih と tshih̄ は allomorph として認めてよい。補注1 (p. 39)

ラフ・シ語の序数詞は、この基本数詞から構成されることなく、ビルマ語から（本来はパーリ語）の借用形式によってあらわされる。

1st patama (Bur. pathamà),	2nd tutiya (Bur. dùtiyà),
3rd tatiya (Bur. tatiyà),	4th satuta (Bur. sàdouʔthà),
5th pisama (Bur. pyinsàmà),	6th sathama (Bur. sàthà),
7th dathama (Bur. θattàmà).	8th ʔahthama (Bur. àthàmà),
9th mavama (Bur. nàwàmà),	10th dathama (Bur. dàθàmà)

そのほか数詞に関連した表現につぎの形がある。[分数]……分の…… ……pǎ……pǎ

$\frac{1}{2}$ nih pǎ té pǎ, $\frac{1}{3}$ sèh pǎ té pǎ, $\frac{1}{5}$ ɲáh pǎ té pǎ, $\frac{1}{100}$ tih hàh pǎ té pǎ,
 $\frac{5}{100}$ tih hàh pǎ ɲáh pǎ

[加算]……+……=…… ……lěh……#…… 1+1=2 té lěh té # níh
 2+2=4 níh lěh níh # ʔəh-léh

[減算]……—……=……#……zûh bàh #… : 10-5=5 té tshih # ɲáh zûh bàh # ɲáh

[乗算]……×……=……#…pǒ #…… : 10×2=20 té tshih # níh pǒ # níh tshih

[除算]……÷……=…… ……thâ……tsah #…… :

10÷2=5 té tshih thâ níh tsah # ɲáh

ラフ・シ語には、西欧方式が入って、七曜が使われる。日曜日を始めとして、漢語のように月曜日以下には数詞が加えられる。

1 週間 té sǐ (2 週間 níh sǐ 3 週間 sèh sǐ)

日曜日 sǐ nih, 月曜日 sǐ pûh té nih 火曜日 sǐ pûh níh nih,

水曜日 sǐ pûh sèh nih, 木曜日 sǐ pûh ʔòh nih, 金曜日 sǐ pûh ɲáh nih

土曜日 sǐ pûh kho nih

sǐ…nih の間に pûh + 数詞が挿入される。この pûh は <第…> の意味であろうか。

分一時間はビルマ語からの借用形である。

1 分 té mî nî (Bur. tamani?), 1 時間 té nà li (Bur. tanayi), 1 日 té nih,

1 カ月 té hàh páh, 1 年 té khô

長さの単位には ʔòh-láh が使われる。té lách <1 マイル>, té hàh lách <100 マイル>

重さの単位には, ma tsôe と páh, mǐ, sèh が使われる。té tsôe <1 viss>, níh tsôe <2 viss>, té páh <1.5kg> -10倍→ té mǐ <15 kg>-10倍→té sèh <150 kg>

名辞表現が数詞をとまなう場合、必ず範疇詞が要求される。しかし、ラフ・シ語の範疇詞は種類が少なく、つぎの3種類に限られる。

gáh <人間に対して>	} 生物	tshóh té gáh <人一人>
khEh <人間以外の動物に対して>		píh té khEh <犬一匹>
mah <その他に対して>	無生物	mǎh kih té mah <星一つ>

この例のように、S- 数詞—範疇詞の順序に並べられる。なお、この範疇詞が ɲáh té gáh kài-veh <私一人で行く>, tsòh lòh té gah mah tshôh <ここには誰 (= 1 人) もいない> のような表現にも使われる。

9. 叙述文を構成する動辞表現の基本型は, group V-veh であった。この基本型 V-veh に替わり得る動辞表現の形式は, つぎの 2) 以下である。

1) 基本型 V-veh : その否定形式は, 上掲のごとく mah-V である。

ɲáh # tshǎh-veh <私は洗う> ɲáh # mah tshǎh <私は洗わない>

ɲáh # kài-veh <私は行く> ɲáh # mah kài <私は行かない>

ɲáh # tsáh-veh <私は食べる> ɲáh # mah-tsáh <私は食べない>

2) V-pè-veh : 基本形 V-veh に対する完了態を示す形式。その否定形式は mah V-pè であ

る。lâh-veh <来る>, lâh-pè-veh <来た>, mah lâh-pè <来なかった>。ŋâh# líh kǒ ɣoh-pè hèh <私は書物を読みおえてから…>。ʔòh, kǒ-pè-veh <ああ, 言いました>, mah kǒ-pè <言わなかった> (cf. Bur. -pi “perfective mode”).

3) V-tuh-zòh: 基本形 V-veh に対して未来時称を示す形式である。その否定形式は mah V-tuh zòh である。lâh-veh <来る>, lâh-tuh-zòh <来るでしょう>。mah lâh-tuh-zòh <来ないでしょう>。ŋâh # nǎ thoh/ kài tuh zòh <私は病気だけれど, 行くでしょう>。

4) V-ɣàh-veh: 基本形 V-veh に対する可能態を示す形式。その否定形式は V-mah-ɣàh-veh である。

ŋâh# tsâ-mèh thâ / dǒ ɣàh-veh <私は虎を打ち得る>。dǒ mah-ɣàh-veh <打ち得ない>。ŋâh # pǎh-ɣàh-veh <私は背負い得る>。pǎh mah ɣàh <背負えない>。nôh # làh hùh sih khóh / kǒ-ɣàh-veh <あなたはラフ・シ語を話せる>。kǒ-mah-ɣàh <話せない>。(cf. Bur -yà <-ra, Lisu V-kuá-ʔah>。

この V-ɣàh に替わって, V-phEh を使うこともできる。dǒ phEh <打てる>, mah dǒ phEh <打てない> (技術的に), dǒ mah phEh <打つことが出来ない> (ほかの理由で)。しかし, インフォーマントは, V-ɣàh のほうをよく用いた。

5) V-ɣáh-veh: 基本形式 V-veh に対する願望態を示す形式。その否定形式は mah V-ɣáh-veh である。

ŋâh # tshih kè tè-ɣáh-veh <私は, このようにするのを望む>, tshih kè mah tè-ɣáh-veh <このようにするのを望まない>。kǒ ɣáh-veh <話したい>。mah kǒ ɣáh-veh <話したくない>。ʔòh tsáh-ɣáh-veh <ご飯をたべたい>。

可能態と願望態は, 否定形式で否定助辞 mah が対照的な位置におかれる。

可能態否定 ʔòh tsáh mah ɣàh <ご飯をたべられない>

願望態否定 ʔòh mah tsáh ɣáh-veh <ご飯をたべたくない>

nih mah ɣàh <見れない>

mah nih ɣáh-veh <見たくない>

6) V-tsxh-veh: 基本形 V-veh に対する使役態を示す形式, その否定形式は mah V-tsxh である。

nǎh-veh <起きる>。nǎh-tsxh-veh <起こす>。mah nǎh-tsxh <起こさない>。

míh-veh <坐る>。ŋâh # nô thâ / míh-tsxh-veh <私はあなたを坐らせる>(cf. Bur. V-sei “causative”, Lisu V-kji)。

7) mah V-se: 基本形式 V-veh に対する未然態 (まだ…していない) を示す形式。

zòh # kài-veh <あの人は行く>。zòh # mah kài se <あの人はまだ行かない>。zòh # kǒ-veh <あの人は話す>。zòh # mah kǒ-se <あの人はまだ話していない>。その発問形式は

-láh をつけて構成される。zóh# mah kài-se-láh <あの人はまだ行っていませんか>。
zóh # mah kǒ-se-láh <あの人はまだ話していませんか> (cf. Bur. mà V θēi phū, Lisu màh V-hè).

8) V-dzòh-veh: 基本形式 V-veh に対して, 過去の経験(…したことがある)を示す形式。その否定形式は mah V-dzòh または V mah dzòh であらわされる。

ŋâh # kúh thêh / kài dzòh-veh <私はバンコクに行ったことがある>, kài mah dzòh または mah kài dzòh <行ったことがない>。tshǒh lòh # lâh dzòh veh <ここに来たことがある>, lâh mah dzòh ~ mah lâh dzòh <来たことがない>。(cf. Lisu V-tsóh-ʔah)

9) V-thóh: 基本形式 V-veh に対して, 責任を示す形式(まさに…すべきだ(ought to))。その否定形式は, V mah-thóh である。

zâh nih / ŋâh # kài thóh <きょう, 私は行くべきである>。

zâh nih / ŋâh# mah kài thóh <きょう, 私は行くべきでない>。

zâh nih / ŋâh# ǰă sâh mah tsáh thóh <きょう, 私は鶏肉を食べるべきではない>。

kĕh thóh <必ず> の thóh と同じ形態素であろう (cf. Bur.-tò <-tɔ³>)。あとであげる <…だが>-thòh と対照される (cf. Bur. -θo-lê)。

10) V-tû: 基本形式 V-veh に対して, 義務を示す形式(…せねばならない)。その否定形式は mah V-tû である。

ŋâh # kài tû <私は行かねばならない>, ŋâh# mah kài tû <私は行ってはならない>,

ŋâh# kǒ tû <私は話さねばならない>, ŋâh# líh bĕh tû <私は字を書かねばならない>。

11) tàh-V: 基本形式 V-veh に対して禁止を示す形式(…するなかれ)。

tâh kài <行くな>, tâh kǒ <言うな>, zóh thâ tâh kǒ <あの人に言うな>, né thâ tâh kóh <精霊を怕れるな> (cf. Lisu thâh-V)。

12) V-lòh: 基本形式 V-veh に対して命令形式を作る。dǒ-veh <打つ>→ dǒ-lòh<打て>,
hèh, lâh-lòh <おい, 来なさい>, nôh# ʔôh tòh kài-lòh <あなたは自分で行きなさい>,
nôh sĭh kǒ, kǒ-lòh <あなたは知っていたなら言いなさい>, ʔǒ-veh ŋâh thâ zùh lâh pĭh
lòh <それを私のところにもって来て下さい>

つぎのように -lòh をともなわないで, -V 単独で命令形式を構成する場合もある。

hâh nâ kǒ <速く話せ>, hàh nâ bĕh <速く書け>, ʔah dzè dzè kǒ <ゆっくり話せ>。

13) V-tshE-veh: 基本形式 V-ve に対して複数表現を構成する。

ŋâh # lâh-veh <私がある>, ŋâh-hĭh ŋâh gâh # lâh-tshE-veh <私たち 5 人が来る>,

nôh # kài-veh <あなたは行く>, nôh hĭh # kài tshE-veh <あなたたちが行く>。

主語の複数形式と相応じて, 動作を示す動辞表現は -tshE-veh をともない得る。しかし, これは義務形式ではない。ちょうどビルマ語の …tòu…càde の表現形式と並行する。(cf. Bur.

cundo·lade <私に来る> → cundodòu lacàde <私たちが来る>

14) V-tshéh-veh: 基本形式 V-veh に対する持続態を示す形式。その否定形式は mah V-tshéh-veh である。

nih-veh <見る>, nih-tshéh-veh <見ている>, mah nih-tshéh <見ていない>。nôh # nsh-tshéh-veh lách <あなたは起きていますか?>

(動辞の複数表現 -tshE は, ビルマ語 -cà <kra³ にあたったが, この持続態 tshéh は, ビルマ語 ca- <kra- “to be long in doing” に該当する。)

15) V-thâ: 基本形式 V-veh に対して, 完成態を示す形式 (…してしまった)。その否定形式は, mah V-thâ である。

ŋâh # pôh kài thâ <私は以前に行っていました>

mah kài thâ <行っていません>

16) V-mah V: 基本形式 V-veh に対する発問形式を示す。-lách 発問助辞を挿入した V-lách mah V-lách の形式をとる場合もある。

sih-veh<知る>, sih mah sih<知っているか>, sih lách mah sih lách <知っているか>, kài mah kài=kài lách mah kài lách <行きますか>, yâh mah yâh <できますか>。

17) V-tûh: 基本形式 V-veh に対して, 動名詞形 (……であるのは, ……ことは, ……あるもの) を作る。(cf. p. 20)

zôh # lâh-veh, <あの人が来る>。zôh # lâh-tûh # dâh dzâh-veh <あの人が来ることは, 大へんよろしい>, kîh-veh <入れる> kîh-tûh ?ô-lôh tshôh-veh <入れるものは, あそこにある>。

18) V-dâ-veh: 基本形式 V-veh に対して, その相互形を示す形式 (互いに……する)。

dǎ-dâ-veh <互いに打ち合う>, kho-dâ-veh <ませ合わす>, zah-dâ-veh <けんかする>。
phúh-dâ-veh <出会う>, phón dâ-veh <互いに考える>。

なお, このほかにも, 基本形式から作られる種々の職能形式を抽出することができるであろう。

ラフ・シ語の複文では, 従属文はつねに主文の前に置かれる。主従複文において, 従属文の動辞表現にあらわれる形式をつぎにあげよう。

1) V-lèh: 主文の行為, 状態がおこった理由を示す形式 (因果句)。

?ah míh nih /msh zfh-lâh-lèh / ŋâh mah kài-veh <昨日, 雨が降ってきたために, 私は行かなかった>

lih kóh tshih mah dâh-lèh / ŋâh mah vih-veh <この書物はよくないために, 私は買わない>

2) V-kô: 主文の行為, 状態がおこる条件, あるいは仮定を示す形式 (条件句)。

sǎh-pòh nòh tshéh sàh kǒ/ lǎh-lǒh <明日, 天気がよければ, 来て下さい>

ŋǎh nah kǒ / mah kài <私が病気であれば, 行かない>

ŋǎh mah hEh kǒ / ŋǎh zǎh kài-veh <私でなければ, 私の子供が行きます>。

この -kǒ は, <話す> kǒ-veh と同じ形態素であり, ラフ・シ語も漢語やタイ語と並行した表現法をとっている。

3) V-thòh: 従属文の状態と反対あるいは譲歩した形で, 主文の行為・状態がおこることを示す(譲歩句)。

ŋǎh nah thòh / kài tuh dzô <私は病気だけれども行きましょう>,

hóh dzǎh thòh / pǎh ǵǎh-veh <大へん重いけれども, 背負って行ける>

lòh dzǎh thòh / pǎh mah ǵǎh <大へん軽いけれど, 背負って行けない>。²⁵⁾

10. 連動式 group V の単語に, 同じく group V の単語が結び付いて, 二つの連続した動作あるいは主要形態素のあらかず動作の趨勢方向を示すことがある。結び付く形式は, つぎの<行く> <来る> の意味をもつ形式がもっともよく使われる。V-lǎh-veh <…して来る>, V-kài-veh <…して行く>。

yíh-veh <走る>: yíh-lǎh-veh <走って来る>, yíh-kài-veh <走って行く>。

lúh-veh <入る>: lúh-lǎh-veh <入ってくる>, lúh-kài-veh <入っていく>。

tse-veh <落ちる>: tse-lǎh-veh <落ちてくる>, tse-kài-veh <落ちていく>。

zúh-veh <もつ>に対して, zúh-lǎh-veh <もって来る>, zúh-kài-veh <もっていく> はあとに結合される形式の相違によって表現される。その否定形式は *zúh mah lǎh ではなくて, mah zúh-lǎh, mah zúh kài である。

もちろん Group V の形態素の性格によって, 結び付き得る形式が限定されるのも当然である。gǎh-lǎh-veh <到来する> はあり得るが, *gǎh-kài-veh はない。mĕh-kài-veh <消え去る> はあるが, *mĕh-lǎh-veh はない。

これらの連動形式 V-lǎh-veh, V-kài-veh はそのいずれかあるいは双方が, 基本形式 V-veh と並存する点にも特徴がある。

このほか, 上述の zúh-veh <とる> が ǵǎh-zúh-veh <受け取る> に包含されるように, V-V₂-veh の結合形式の V₂- の位置にたち得る形態素として, -tǎ-, -nih-, -tǎh-, -bǎh- をとり出すことも可能である。

25) そのほかに, つぎの形式を補っておきたい。

-lí- -lí- <…も…も>: dǎh veh lí tshôh, mah dǎh lí tshôh <好いのもあるし, 悪いのもある>

-kǎh <…や…>: núh kǎh mǎh khǎh pǒe tsòh lòh tshôh-veh <牛や馬やすべてここにありません>

-lèh- -lèh- <…ずつ>: tshôh te gǎh lèh lèh / li kǒ te-ma lèh lèh tshôh-veh <一人につき書物一冊ずつもっている>

zûh-tǎ-veh <引き出す>, nǎ-tǎ-veh <暗くなる>, zâ-tǎ-veh <恥ずかしくなる>。この -tǎ- は tǎ-veh <出す, 出る> (tǎ-kài-veh <出ていく>)と同じ形態素である。náh-nih-veh <尋ねる>, dǒh-nih-veh <考える> の -nih- は <見る> の意味であり, <尋ねてみる> <考えてみる>にちょうどあたる。

kúh-tàh-veh <掛ける> thoh-tàh-veh <ねらう>
nĕh-tàh-veh <くっつける> tsûh-tàh-veh <集める>

この -tâh- は tâh-veh <置く>と同じ形態素である。kǒh-bâh-veh <脱ぎはらう>, sĭ-bâh-veh <拭いはらう> の bâh-veh は <放す, 投げる>と同じ形態素である。

そのほかに, bǎh-féh-veh <書き送る> の féh-veh <送る> とか dǎ-pĕh-veh <打ち殺す>の pĕh-veh などに見られる動辞表現の複合形式が考えられるが, ここではあげない。

11. ラフ・シ語の group V の単語の中で, 自動詞と他動詞の区別が, 音素形式の一部のみに対立をもつ二つの形態素で示されることはまれで, つぎのような構成で表現されることが多い。

- 1) kǎ-veh <恐ろしい> thĕh-veh <折れる>
2) tĕ-kǎ-veh <恐れる> ŋǎ-thĕ-veh <折る>
1) sĕ tsĕ # kǎh-veh <木が曲る>
2) ŋâh # sĕ tsĕ thâ ŋǎ-kǎh-veh <私は木を曲げる>

自動詞と他動詞が, たとえば tshĕ-veh <切れる>と tǎh-veh <切る>のように, 互いに関連のない音素形式をもつ2形態素で分割して表現される例もあるが, つぎのように二つの形態素の一部の音素の対立が自動と他動といった職能の違いをになっている例もある。

unasp. intr. tse-veh <落ちる> tsĕh-veh <尖る>
asp. tr. tshe-veh <落とす> tshĕh-veh <尖らす>

この種の例はごく限られた数しかない。

phĕh-veh <解く> tsáh-veh <食べる>
phĕh-veh <結ぶ> tsâh-veh <餌をやる>
jih-veh <小さい>
?ih-veh <大きい>

初頭音の性格や声調の違いが対立した意味の差異をになっている事実は, この系統の言葉の重要な特徴と一致する。

12. 限定関係 group S の形態素が group S の形態素を限定するときには, 上に述べた数詞+範疇詞 および S + 指示詞 によるほかは, 必ず限定-被限定 (S→S) に並べられる。

?ǎh síh → ?ǎh yĭh (果物 → 汁) <果汁>
nuh → tsùh yĭh (牛 → 乳) <牛乳>

na pǎ → kǐh-tǔh (耳 → 掛けるもの) <耳環>

ʔǔ pǐh → nǎh (腹 → 病気) <腹痛>

限定詞が S group のうち、人称代名詞である場合には、ŋǎh <私>、nǎh <あなた> に替わって、異形態 ŋǎ, nǎ があらわれる。

ŋǎ pǎh <私の父> nǎ zǐh <あなたの家>

ŋǎ ze <私の母> nǎ pǎh <あなたの父>

この ŋǎ-, nǎ- は上述の ŋǎh-veh <私の>、nǎh-veh <あなたの> とは職能の上では等しくない。というのは、*ŋǎh-veh pǎh は可能ではなく、ŋǎh-veh は必ず ʔah-pǎh をともなう。ŋǎpǎh: ŋǎh-veh ʔah-pǎh. このように親屬名詞は ŋǎ, nǎ 形式と連続する以外では、ŋǎh-veh nǎh-veh を含めてすべて ʔah-, ʔǎh- 接頭辞をとる。しかし、事物をあらわす名辞表現の場合には、ŋǎ zǐh <私・家> でも、ŋǎh-veh zǐh <私の家> でも共に許される。

ŋǎ nuh lǎh = ŋǎh-veh nuh lǎh <私の牛車>

ŋǎ táh kǎh = ŋǎh-veh táh kǎh <私の箱>

ŋǎ sǎ tsǐh = ŋǎh-veh sǎ-tsǐh <私の樹>

したがって、親屬名詞に前接される ʔah-, ʔǎh- と、そのほかの S group の単語にあらわれる ʔah- ʔǎh- とはこの点で異なっているといえる。

これに対して、group S の形態素が group V の形態素に限定されるときには、S ← V とし、被限定 + 限定 の順に並べられるか、または V-veh S となって 限定 + 被限定 の順をとるか、のいずれでもあり得る。

tshǎh ← dǎh (dǎh-veh) (人間 ← 良い) <良い人>

tshǎh ← mǎh (mǎh-veh) (人間 ← 年寄る) <年寄りの人>

tshǎh ← ɣǎh (ɣǎh-veh) (人間 ← 気狂い) <気狂いの人>

mǎh-veh → tshǎh ([背が]高い → 人間) <背の高い人>

mǎh mǎh-veh → tshǎh (否定・[背が]高い → 人間) <背の高くない人>

ʔah-sǎ jih-veh → tshǎh (歳・小さい → 人間) <年少の人>

Group V の形態素が group S の形態素に限定されるときには、限定・被限定 (S → V) の順序をとる。

té-mǎ → kǎi-veh (一度 → 行く) <一度行く>

sǎh-pǎh → tshǎh-veh (3回 → 洗う) <3回洗う>

té thǎh té thǎh → tsǎh-veh (一口一口 → 食べる) <一口一口食べる>

té hǎh té hǎh → tsǎh-veh (毎晩毎晩 → 食べる) <毎晩毎晩食べる>

té nih té nih → tsǎh-veh (毎日毎日 → 食べる) <毎日毎日食べる>

ただ, dzáh <たいへん> は group V の単語のあとに置かれる。dâh-dzâh-veh <たいへんよろしい> であって *dzâh dâh-veh とはならない。

動辞表現を限定する単語として, つぎの形式がある。いずれも被限定詞に先行する。

khâh péh <もっとも, 多くの>	khâh péh → dâh-veh <もっともよい>
khâh dêh <よく>	khâh dêh → sih-veh <よく知っている>
khâh pœ <すべて>	khâh pœ → dzôh-veh <すべてもっている>
khâh thâh kâ <いつも>	khâh thâh kâ → zôh-veh <いつもねている>
?ôh yùh sôh <あとで>	?ôh yùh sôh → lâh-veh <まもなく来ます>
té pôh tih <いますぐ>	té pôh tih → lâh-veh <いますぐ来ます>
kêh thôh <必ず>	kêh thôh → lâh-veh <必ず来ます>
kôh kô <再び>	kôh kô → lâh tuh zôh <再び来ましょう>

これらの限定・被限定の関係がもっと拡張され, 上述の関係が組み合わさったときには, たとえば <この一人の若い人間>, <あの一匹の白い犬> は, それぞれつぎのように並べられる。

この人間	一人の人間	良い人間	若い人間
S → S	S ← S	S ← V	S ← V
		V → S	V → S
tshôh-tshih	tshôh té gâh	tshôh-dâh	tshôh-hâh
		dâh-veh tshôh	hâh-veh tshôh
V → S ← V ← S ← S			
dâh-veh tshôh hâh tshih té gâh		<この一人の若い良い人間>	
あの犬	一匹の犬	白い犬	大きい犬
S ← S	S ← S	S ← V	S ← V
		V → S	V → S
phih-?ô	phih té khEh	phih-phuh	phih ?ih
		phuh-veh phih	?ih-veh phih
V →	S ←	V ←	S ← S
?ih-veh phih phuh ?ô té khEh <あの一匹の大きい白い犬>			

あ と が き

以上, ラフ・シ語の音素構造および文法体系について基本的な事柄を記述した。しかし, 資料に制限されて, 不備な点が多くあった。ここでは用いることができなかった数編の物語は, 本稿の記述の不備を, 近い将来補うであろう。

本稿は, まえに発表した「リス語の研究」と概略一致する構成をもって書いた。その結果は,

両者の特徴を容易に引き比べることを可能にするであろうし、わたしの構想のうち、第3段階として取り上げる「ラフ・リス語比較文法」に先だつ記述として多くの利点がある。

言葉の記述はいくらでも精細にすることができる。しかし大切な事柄は、その精細さ自体にあるのではなくて、その言葉の構造上の枠づけをいかにうまくくみとっているかにある。その言葉のもつ枠づけが、言葉の一般類型からみていかなる価値をもつものであるのか、新しいパターンを提供するかどうか、音声現象に何かほかの言葉にないものをもっているかどうか、それらの点で個々の言葉の記述に興味をもつべきであり、その点で個々の言葉の記述が一般言語学に貢献すべき性格を具えなければならない。

〔補注1〕(p. 19) ロロ・ビルマ語系の言語が全般的に音節高声調体系から単語高声調体系に移行しつつあるのではないかという発問を、筆者はアカ語とラフ・シ語に認められる現象から提出したい。

この事柄は、日本語を特徴づける単語高声調体系がもともとの音節高声調体系から発展した可能性を示唆している。

しかし一方では、このことは、ラフ・シ語とラフ・ナ語の声調の対応関係の発見に少し厄介な問題をも提供する。両者の間で例外的な対応関係を示す単語は、共通形式の声調が一致しなかったためなのか、あるいは共に音節としては同じ声調類に属していたが、ラフ・シ語またはラフ・ナ語において、単語高声調の様式に統一される過程で個別的な変調が起こったのかを検討する必要があるからである。この問題は、別稿「ラフ語比較文法」において論じたい。

〔補注2〕(p. 24) 動詞につく接尾辞と属格を示す接尾辞が、同形式であるか否かは、チベット・ビルマ語系の言語を類型に分ける一つの基準になる。ラフ語は、同じ形式であらわす言語類型の代表的な言葉である。そのほかアカ語、ビス語、ビルマ語なども同じ類型に属する。

〔補注3〕(p. 30) ラフ・シ語の数詞(ラフ・ナ語も同様)は、2音節形式をとって、形態素 *-màh* または *-léh* を接尾する。これは、アカ語やビルマ語に対するラフ語の特徴的な性格を示している。*-màh* は、あるいは無生物につけられる範疇詞 *-mah* の異形態素であるかもわからない。しかし、3と4と9にのみなぜ *-léh* がつけられるのかは、明らかではない(ラフ・ナ語ではすべて *-mah* がつけられる)。数詞1から9までの核形態素は、したがって、*té-*, *níh-*, *sèh-*, *?òh-*, *qáh-*, *khó-*, *sòh-*, *híh-*, *kòh-* である。